



MAKE NEW STANDARDS.

東海国立
大学機構



岐阜大学

第11号

岐阜大学

国際交流年報

2025



Gifu University Organization for Promotion of Globalization GU-GLOCAL

岐阜大学 グローカル推進機構

Table of contents

目次

学長メッセージ

岐阜大学国際交流年報 第11号の発行にあたって

I	国際化推進体制	5
1.	岐阜大学の国際化推進体制	5
	各部門の活動報告	6
	学内の国際化をサポートする体制（日本語・日本文化教育体制／保健管理体制）...	10
2.	海外大学・機関等との学術・学生交流協定	15
	本年度に新規締結した協定大学等	15
	大学間学術交流協定締結大学・機関マップ	16
	部局間学術交流協定締結大学・機関マップ	18
	外国人留学生在籍数	20
	本学学生の海外派遣実績	21
	 トビタテ！留学 JAPAN とは？	24
	本学教職員派遣実績	25
	外国人研究者・来訪者受入れ実績	25
	国際協力活動（JICA 事業）	26
	短期研修プログラム（サマースクール／Collaborative Video Making Program／ Winter School／Spring School Program）	27
3.	国際交流活動	30
	国際協働教育・地域国際化関連	30
	留学推進・国際企画関連	31
	留学生就職促進プログラム関連	34
	日本語・日本文化教育センター関連	35
	学内の国際化の取組	36
	大学の世界展開力強化事業	38
	地域国際化の取組	40
	全国大学 JDP 協議会	40
	留学生のための就職支援プログラム	41
	岐阜地域留学生交流推進協議会	42
II	各学部・研究科等の主な国際交流活動	43
1.	教育学部	43
2.	地域科学部	44
3.	医学部・医学系研究科	46
4.	工学部	48

5. 応用生物科学部	50
6. 連合農学研究科	52
7. 保健管理センター	53

III 大学の国際化と学生支援 57

全国大学ジョイント・ディグリープログラム協議会に関する覚え書き

..... 野々村 晴 子	57
---------------	----

国際が実施する産官学連携の歩み	三 輪 真 一 60
-----------------------	------------

IV 資料 63

1. 令和7年度グローバル推進機構名簿	63
2. 協定一覧	65
3. 本学の国際関連活動	68
学長表敬訪問（来訪・往訪）	68
令和7年度国際関連事業一覧（全体）	69
4. 大学間学術交流協定先との交流状況	71
5. 海外オフィス・研究施設	73
6. 国際共同研究等の採択実績	73
（公財）田口福寿会助成金	73
7. 留学生の地域貢献	74
8. 令和7年度における各種広報資材	75

学長メッセージ

ソーシャルインパクトの創出に向けて

岐阜大学は名古屋大学と法人統合し、国立大学法人東海国立大学機構として、将来の国立大学の新たなモデルとして発展を続けています。「Make New Standards for the Public」というミッションを共有し、ビジョンを「地域共創、特色ある研究、イノベーション、教育を戦略的に推進し、地域と人類の課題解決に貢献する『地域活性化の中核拠点』となる」と定めました。

1949年の創立以来、受け継がれてきた岐阜大学のモットーは「人が育つ場所」、育成の目標は「学び、究め、貢献する」人材です。Society5.0の時代を担う人材育成として、国際通用性のある質の高い教育を実践します。それにより「国際化を通じてより一層の地域貢献」を行う地域中核大学として、国内外で活躍する次世代を担うリーダーとなり得る人材を育成することを目指します。とくに国際化の進捗状況を確認する基礎資料が岐阜大学国際交流年報であり、2015年度版から刊行が始まりました。本学では、日本国内の地域と海外の地域とが教育、研究、あるいは社会・経済活動についてマッチする課題を共有し、それを解決することによって得られる成果が双方の地域振興に結実するという実践的な国際化を目標にしています。

2022年から第4期中期目標・中期計画が始まり、岐阜大学では、国際展開が加速しています。「大学の世界展開力強化事業」においては、2022年に「インド太平洋地域等との大学間交流形成支援」に採択されたのに続き、2025年は「グローバル・サウスの国々との大学間交流形成支援」に採択され、インド工科大学グワハティ校、岐阜・東海地域及び北東インド地域の産官学と連携した各種取り組みが発展しています。JDP（Joint Degree Program）を中心とした人材育成も主導しており、岐阜大学は全国大学JDP協議会の会長を継続して担当しています。

大学間協定は、20カ国51大学、部局間では29カ国1地域61部局、さらに個人レベルでの共同研究は、極めて多く行われています。2025年度の交流として、南フロリダ大学レア・ロー学長らが本学を訪問（2025.4）され学術交流協定の更新調印式を行いました。10月にはチェンマイ大学ポングラック・スリバンディトモンコル学長らが本学を訪問され、大学間学術交流協定の更新に関する署名式を行いました（2025.10）。また、2025年度には9月にマレーシア国民大学、マラヤ大学、アングラス大学を訪問しました。3月にはインド工科大学グワハティ校を訪問しましたが、その際、北東インド・日本大学連携コンソーシアムの設立に向けた意向表明書に日本側の調整機関としての署名も行いました。

さて我が国は、2023年4月に教育未来創造会議第二次提言として、「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（J-MIRAI）」をとりまとめ、コロナ後の新たな留学生派遣・受け入れ方策や、留学生の卒業後の活躍に向けた環境整備、教育の国際化の推進などが提言されました。すなわち、世界最先端の分野で活躍する高度人材から地域の成長・発展を支える人材まで厚みのある多様な人材を育成・確保し、多様性と包摂性のある持続可能な社会を構築する。そして、我が国の更なる成長を促し、国際競争力を高めるとともに、世界の平和と安定に貢献していくことが盛り込まれました。さらにこれまでの留学生交流については、量を重視するのみならず、質の向上を図ることも重要視されます。いずれにしても、より強力に高等教育段階の人的交流を促進し、世界に伍する水準への改革を進め、海外に留学した日本人学生の就職の円滑化や日本で活躍を希望する外国人留学生の国内への定着が促進されます。これらの指針に沿った形で、岐阜大学も東海地区の大学などの連携を深め協働し、国際展開を推進します。



岐阜大学長 吉田和弘

2026年6月5日 岐阜大学長 吉田 和弘

岐阜大学国際交流年報 第11号の発行にあたって

岐阜大学の国際交流に関する年報「岐阜大学国際交流年報」の第11号を発行いたします。この年報は、「大学の国際化とその地域還元」とする岐阜大学の理念の下でグローバル推進機構（Gifu University Organization for Promotion of Glocalization: GU-GLOCAL）が実施した令和7年度の国際活動（教育、研究、地域貢献）について、岐阜大学国際交流ニュースレターやグローバル推進機構の各部門及び、学内部局が発信した記事の掲載を中心にまとめています。

令和7年は、令和7年度大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～グローバル・サウスの国々との大学間交流形成支援～」が新たに採択され、令和4年度に採択された大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～インド太平洋地域等との大学間交流形成支援～」と並行して、インド工科大学グワハティ校との協働教育の取り組みを強化した年になりました。2019年に運用を開始したジョイント・ディグリープログラムを中軸として、地域課題を世界的課題と関連させて解決する教育（グローバルエキスパートプログラム；令和4年プログラム）、スマートマニファクチャリングに関するマイクロクレデンシャルの開発・実施（令和7年プログラム）により、社会人教育にも対応できる国際的な教育プログラムの実施・運営能力の強化に努めてきました。この活動では、「岐阜インド人技術者・科学者コミュニティ」の設置によるJDP学生の地域定着の支援や、2種類の短期研修プログラムを開発し、経済界と連携した海外短期派遣プログラム基準と連動させる構想に着手するなど、地域や社会の国際化への貢献も視野に入れた活動を展開することができました。このような活動は、地域に根差す大学である本学が目指す国際化の理念に沿ったものと考えています。

一方、各部局が実施する国際化プログラムも、それぞれが地域との連携の側面を発展させています。医療、看護分野では、南フロリダ大学と医学部を中心とする交流の深化し、ヘルスケア分野、臨床分野などの海外研修プログラムを相互に実施する体制が整いました。この交流は、留学を伴わない新しい形の国際共修教育（COIL）の実施につながり、連合創薬研究科における生化学に続き、地域科学部では学士レベルの文化学習プログラムを開始しました。今後は、このような国際協働教育の強化が期待できます。

末筆になりますが、この原稿を書いている時点で、世界的な紛争やインフレにより、円安が進む日本人学生だけでなく、留学生にとっても海外で学ぶことが難しくなりつつあります。しかしながら、一国のみでは解決できない、「地球規模の課題」が問題となる中で、学生の国際的な環境での学びや交流の機会を維持することは引き続き重要だと考えます。様々な面で、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。



グローバル推進機構長
小山 博之

I. 国際化推進体制

1. 岐阜大学の国際化推進体制

本学はジョイント・ディグリープログラム（JDP）を基軸としたグローバルリーダーの育成と留学生ネットワークの構築により、地域に根ざした国際化を実現することを「岐阜大学のミッション・ビジョンと戦略」に掲げている。グローバル推進機構では、教員と事務職員が協働し、地域に根ざした国際化と成果の地域還元を推進するため、グローバル推進機構長のもとに、国際協働教育推進部門、地域国際化推進部門、留学推進部門及び国際企画部門の4部門を設置し、全学的な組織として各部局との連携により本学のさらなる国際化を目指している。



グローバル推進機構ホームページ



THE 世界大学ランキング日本版掲載：冊子



YouTube チャンネル

各部門の活動報告

令和7年度 国際協働教育推進部門活動報告

部門長 中川智行
(応用生物科学部 教授)

1. 活動内容及び成果

国際協働教育推進部門は、学生の国際的視野の育成を目的とした国際協働教育の推進ならびに、各部署が運営する大学院ジョイント・ディグリー（JD）専攻に対する側面的支援を主要な役割としている。これらの目的に基づき、教員・学生の相互派遣支援、合同シンポジウムの開催、広報活動等を中心に事業を展開している。

教員の海外派遣については、令和7年度において若手・中堅研究者海外研修プログラムを通じ、教員3名を米国および英国へ派遣し、海外研修を支援した。

学生の相互派遣に関しては、JDに関してインド工科大学グワハティ校（IITG）から修士課程学生4名、マレーシア国民大学（UKM）から博士課程学生2名、計6名のJD学生を受け入れた。一方、本学からは修士課程学生3名および博士課程学生1名をIITGに派遣し、現地における履修プログラムを修了させた。

さらに、本年度も12月にウインタースクールとしてIITG学生7名およびUKM学生2名を受け入れ、日本文化を中心とした研修プログラムを実施した。また、3月にはスプリングスクールとして本学学生10名をIITGへ派遣し、インド文化を主題とする研修を行った。

加えて、学部学生を対象とした新規プログラムとして「AI4 GLOCAL Ideathon Program」を立ち上げた。本プログラムは、AIに関する基礎的理解を踏まえつつ社会課題の探究を行い、IITG学生との共修を通じてアイデア創出を行うものである。12月にはIITG学生3名が岐阜大学に来学、3月には本学学生3名がIITGを訪問し、本プログラムを実施した。

さらに、8月から約5か月間にわたり「Collaborative Video Making Program (CVMP)」を実施した。本年度は、本学学生5名、IITG学生2名、UKM学生2名が3グループに分かれ、「学生生活を比べて分かるユニークポイント」をテーマとした動画の共同制作に取り組んだ。12月には、Zoom Webinar およびOKB 岐阜大学プラザ1階プレゼンテーションエリアを会場とするハイブリッド形式でFinal Competitionを開催し、グループ3の作品「Our Universities, Our Stories」が最優秀作品に選定された。

2. 課題及び次年度の取組方針

ウインタースクールやスプリングスクール、CVMPなど、これまで継続的に実施してきた事業は、内容の更なる精査および実施体制の見直しを行い、より効果的な国際協働教育・交流の推進を図る必要がある。また、本年度に開始したAI4 GLOCAL Ideathon Programについても、内容の高度化・体系化を進め、継続的かつ発展的なプログラムへと改良していく。

今後も、国際協働教育推進部門の諸活動を通じ、学生が国際的視野を実践的に涵養できる機会の一層の充実を図っていく。

令和7年度地域国際化推進部門活動報告

部門長 海老原章郎
(応用生物科学部 教授)

1. 活動内容及び成果

地域国際化推進部門が中心となって実施した活動を以下に挙げる。

(ア) 岐阜ジョイント・ディグリー (JD) シンポジウムと連携したグローバル化のための SDGs 勉強会

学内外の専門家を講師として招き、バイオエコノミーへの転換や脱炭素化社会の実現に関する取組を紹介する本勉強会は今年度で6回目を迎え、令和7年度は岐阜 JD シンポジウムの産官学金連携セッション(12月5日開催)と連携して実施した。セッションは「持続可能な社会への転換を進める企業活動」をテーマとして開催され、本学の JDP コンソーシアムの活動紹介のほか、コンソーシアム参加企業による竹を中心とするバイオマス資源利用に関する取組が紹介された。続いて「ネイチャーポジティブな農業・バイオマス利活用」と題し、東海農政局及びキリンホールディングス株式会社による事例紹介及び意見交換が行われた(対面参加者99名)。当日は、地元企業や文化紹介のブース展示(企業11社・団体8社参加)も開催し、海外からの来賓を含む多くの来場者が訪れ、学生ならびにシンポジウム参加者が東海地域の企業・団体を知る充実した機会となった。

(イ) インド・JD シンポジウム

令和8年3月9日～3月10日、インド工科大学グワハティ校(IITG)においてインド JD シンポジウム「JDP プラットフォームによる日本-北東インド産学技術協力シンポジウム2026」を共催した。シンポジウムには2日間でオンラインを含む延べ190名が参加した(本学教職員19名、学生10名が現地参加)。吉田 和弘 岐阜大学学長が対面で出席し、日印の学術協働の重要性と更なる連携強化に向けたメッセージを発信した。企業連携セッションでは、JETRO(日本貿易振興機構)がインド展開を指向する日本企業への支援活動を紹介した後、シンポジウムに参加した日印企業(日本からは7社※現地法人・グループ会社を含む)や IITG 発スタートアップ企業の取組紹介が行われた。

(ウ) 愛岐留学生就職促進コンソーシアム事業における岐阜県内ワークショップ

岐阜県、岐阜県経営者協会、JETRO 岐阜と本学が共催する本ワークショップを対面方式にて開催した。ワークショップには、県内企業8社および留学生22名(12カ国)が参加した。本事業は、留学生と県内企業との就職マッチング促進を目的としているが、今年度は留学生と企業による双方向交流(グループトーク)を重視した内容とした。「留学生と企業の“リアル”を知る」をテーマに掲げ、留学生と企業担当者からなる少人数のグループを作り、具体的な質問を通じて率直な声を共有した。そして働く側(留学生)と雇う側(企業)の視点から意見を交わし、外国人材がより活躍できる社会のあり方を共に考える機会となった。続く企業ブース展示では、留学生が参加企業のブースを訪ね、担当者と直接交流しながら各社の説明に熱心に耳を傾けていた。

(エ) 地域国際化を推進する勉強会の開催

令和4年度から実施している竹資源利用勉強会としても位置付けた、中部経済産業局及び中部経済連合会との共催で「Meet up Chubu vol.64 CN(バイオマス・竹資源活用)」を6月12日に開催した。参加企業・研究機関から竹をはじめとした植物由来資源の多様な利活用事例が発表された。10月24日には、笹川平和財団 公開セミナー「インド北東部の未来を拓く：多様な文化の調和と社会経済開発」が開催され、本学からは海老原部門長ならびに三輪特任教授が JDP を通じた日印(北東インド)の生物資源を活用した連携産業活動の現状について報告した。

(オ) JDP コンソーシアム参加企業の官公庁訪問

7月1日、本部門は同コンソーシアム参加企業6社と共に、経済産業省通商政策局と JICA、JETRO 本部を訪問し、岐阜大学の近況活動状況および各社による企業紹介、インドでの活動状況、竹資源利活用に関するプレゼンテーションを実施し、各官公庁の政策や今後の動向について情報交換を行った。

2. 課題及び次年度の取組方針

令和8年度も上記(ア)～(オ)の活動を実施・連動させ、グローバルの視点から地球課題を解決する人材育成とグローバル産官学金連携の両面から地域国際化を推進する。

令和7年度留学推進部門活動報告

部門長 嶋睦宏
(工学部 教授)

1. 活動内容及び成果

学生による積極的な国際交流推進を目ざし、留学推進部門では学生が主体的に参加する活動として海外協定大学への派遣プログラムおよび本学での外国人留学生受入プログラムを実施した。具体的には、英語研修プログラムにおいては2025年8～9月に、夏季アルバータ大学 ESL プログラム (Summer Alberta ESL)、グリフィス大学 ESL プログラム (Summer Griffith ESL)、カリフォルニア大学サンディエゴ校 ESL プログラム (Summer UCSD ESL)、及びカリフォルニア大学デービス校 EST プログラム (Summer UC Davis EST)、2026年2～3月に、春季アルバータ大学 EST プログラム (Spring Alberta EST)、アルバータ大学 EFN プログラム (Spring Alberta EFN)、アルバータ大学 ESL プログラム (Spring Alberta ESL) を実施し、Summer Alberta ESL 18名、Summer Griffith ESL 19名、Summer UCSD ESL 1名、Summer UC Davis EST 2名、Spring Alberta EST 4名、Spring Alberta EFN 1名、Spring Alberta ESL 6名が参加した。Spring Alberta ESL では、アルバータ大学と連携し、教育分野に興味がある学生向けに現地での教育分野での交流を一部組み込んだセミカスタマイズプログラムを今年度も実施した。春季にアルバータ大学で実施する各種プログラムでは、2025年度も愛媛大学、名古屋市立大学、名古屋大学等と連携し、参加者募集や渡航時におけるグループ対応、オンラインによる事前研修など、学生にとって有益なプログラム提供が実現できたと考える。プログラム参加者は全員無事元気に帰国し、その多くからは貴重な学びと経験を得ることができたとの声が聞かれた。

岐阜大学サマースクール受入プログラムでは、ノーザンケンタッキー大学 (米国)、南フロリダ大学 (米国)、リール大学 (フランス) 及びブラヴィジャヤ大学 (インドネシア) から計13名の参加者があり、岐阜大学で実施した。日本語授業のほか、本学学生との交流活動、郡上でのホームステイ、美濃での和紙づくり体験、関での日本刀鍛冶見学なども行い、参加者からは日本の伝統文化および現代文化への理解が深まったなどの感想も聞かれた。

本学に在学する外国人留学生の生活支援についても、特に国際交流会館などの住環境をはじめとする修学環境のさらなる整備などについて活発な意見交換を行った。また、「危機管理基本マニュアル (学生関係) 海外渡航編」や「留学ガイドブック」の更新についても、部門活動の一環として実施し、本学の国際化推進に着実に貢献した。



2. 課題及び次年度の取組方針

課題として、昨今の円安傾向に加え、世界情勢が流動化する中、学生の交流を活性化すべく、協定大学との連携を更に強化し、2026年度も引き続き派遣と受入の両プログラムの更なる充実を図り、実質的な人的交流の推進に取り組む。具体的には、多様性と個の尊重がより重視される国際社会の発展へ向けて次世代の人材育成が大学においても重要な使命となる中、国際語としての英語の語学学習にとどまらず、広く異文化への理解にも重点を置いたプログラムの提供に向けた検討を継続していく。また外国人留学生の生活支援やプログラム改善についても、更なる環境整備に努める。

令和7年度国際企画部門活動報告

部門長 古田知美
(グローバル推進機構国際企画調整役)

1. 活動内容及び成果

本部門は、学術交流・協定支援、国際交流に関する IR、国際広報及びキャンパスの国際化支援を主な担当業務として活動した。

令和7年度は、9名の教員および5名の事務職員から構成され、引き続き部門長には事務職員である国際企画調整役、副部門長は松井真弓助教、部門員には年報作成、学術交流・協定、IR、広報誌、ホームページ運営およびキャンパス国際化支援といった担当事項を割り当てて業務に対応する体制としている。

部門の運営にあたっては、部門長、副部門長、国際総務室および留学支援室等で構成する部門ワーキンググループ（WG）を中心に、原則として月1回の定例会議を実施し、情報共有および課題の整理、対応方針の検討を行った。

WGにおいて、1年間を通じて定型的に取り上げた主な事項は、①学術交流・協定支援、②国際交流に関する IR、③国際広報、④卒業した留学生のネットワークづくり、⑤キャンパスの国際化支援、⑥国際企画部門イベント、⑦年度計画への対応である。

①については、毎月、学術交流協定の更新状況を確認し、協定大学の担当者と連絡を取りながら、協定書の更新作業を計画的に進めた。また、協定校等6大学からの学長等表敬訪問を受け入れ、本学の教育・研究・国際事業の紹介や今後の連携強化について意見交換を行った。特にインド工科大学グワハティ校（IITG）においては、IITG 学長が来訪し、学術交流協定の更新以外にも、令和7年度に採択された「大学の世界展開力強化事業」に関連する各種協定を新たに締結するなど、戦略的かつ多層的な連携関係の構築が進展した。②については、国際交流年報および国際 IR データブックを刊行し、グローバル推進機構や部局が実施した国際事業を紹介し、留学生受入・派遣、国際交流活動に関する定量的データの整理・分析を行った。これらの成果は、本学の国際化施策の検討や意思決定を支える基礎資料として活用された。③については、ホームページの更新、NEWS LETTER の発行、ウィンタースクール報告書の作成等を通じて、本学の国際交流活動の特色を国内外に発信した。④については、NEWS LETTER を、本学を卒業した留学生に定期的に配信することで、卒業後も本学とのつながりを維持する取組を継続した。⑤については、事務系職員を対象とした職員海外実務研修を実施した。大学間学術交流協定大学であるカナダ・アルバータ大学において、約2週間の語学研修と国際業務に係るインターンシップを実施したほか、新たな取組として、約2か月に渡り週1回英語による現地事情・岐阜大学事情紹介の講義を行い、その後、マレーシア国民大学（UKM）の事務室等で約1週間の実地研修を行うプログラムを実施した。これにより、参加職員の実践的な英語運用能力および国際業務対応力の向上が図られた。⑥については、7月に、岐阜大学シンポジウム・GU-GLOCAL シンポジウム2025「日本の魅力を発信！ストーリーの力×グローバル視点＝？」を開催した。大学生・高校生など学内外から300名を超える参加者が来場した。

2. 課題及び次年度の取組方針

国際企画部門では、これまでの取組を踏まえ、引き続き本学の国際化を戦略的に推進するため、国際交流イベントの企画・実施、学術交流協定大学との多層的な連携強化、海外からの訪問者に対する円滑かつ機能的な受入対応、教職員を対象とした実践的な研修プログラムの充実に取り組む。あわせて、キャンパスの国際化支援の促進および予算上の制約を踏まえつつ、取組の重点化と効率化を図ることで、より効果的な国際交流基盤の強化を目指す。

学内の国際化をサポートする体制

【日本語・日本文化教育体制】（日本語・日本文化教育センター）

岐阜大学における日本語・日本文化教育は日本語・日本文化教育センター（日文センター）が担っている。日文センターでは、対象学生によって異なる様々なコースやプログラムを提供している（日文センターの活動等については、センターのホームページを参照ください）。



（１）日本語研修コース

本学に在籍する大学院生、研究生及び交換留学生を対象とした１学期間のコースで、前期・後期に開講される。１週間の授業数が異なる「集中コース」と「一般コース」がある。前者は、集中的に日本語を学び、日本語の習得・向上を目指す（週10コマ必修）。後者は、専門の研究が中心であるため、まとまった日本語学習の時間が取れない学生向けの、授業数を選択できるコースとなっている（週１～10コマ選択）。集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の３レベルのクラス、一般コースは初級前半（A1）、初級後半（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級（D）の５レベルのクラスに分かれている。学期が始まる前に学内公募が行われ、指導教員の申請によってコースが決定し、プレイスメントテストの結果によって当人のレベルにあったクラスが決まる。

（２）日本語・日本文化研修コース

自国の大学で日本語・日本文化を専攻する文部科学省奨学金留学生と交換留学生を対象とした、毎年10月に始まる約１年間のコースである。日本語授業や全学対象の授業を受けることにより日本語能力を向上させ、日文センターより提供される多彩な文化科目の受講、地域への見学旅行等により、日本文化・社会について深い見識を養うことができる。コースの終わりには、担当教員の指導のもと、日本語・日本文化に関わる修了論文を完成させ、研究発表を行う。

（３）日本社会文化プログラム

日文センターに所属する交流協定大学の交換留学生（日本語・日本文化学習を希望する、日本語初級～中級レベルの学生）を対象としたプログラムである。「異文化理解」と「日本文化理解」の二つのステップで、日本の社会や文化に関する知識を身につけることを目的に、半年ないしは１年間の研修期間で実施する。日本語を学ぶだけでなく、日本文化の授業や、能楽や郡上踊りなどを実際に体験する「日本文化ワークショップ」にも参加し、日本文化を実践的に学ぶ。

（４）全学共通教育（日本語・日本事情クラス、人文科学科目）

各学部 に在籍する留学生と交換留学生を対象とした、上級レベルの日本語と日本事情に関する科目（４科目）を開講している。また、人文科学科目（５科目）も開講しており、その中には留学生と日本人学生の合同授業もある。

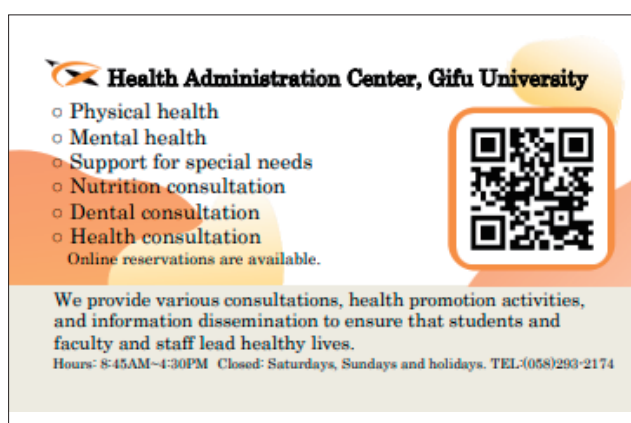
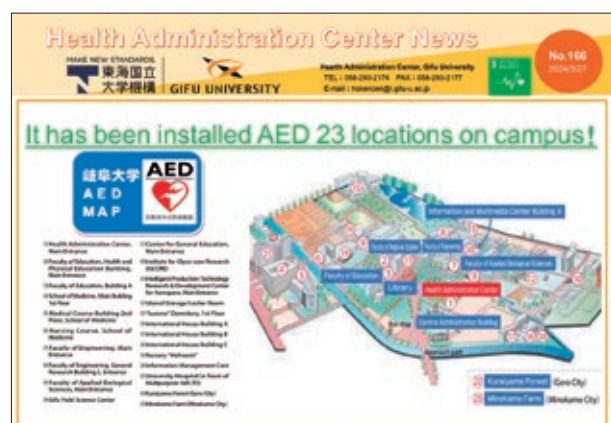
（５）交流ラウンジ

授業以外での日本語・日本文化教育の場として、日文センター内には「交流ラウンジ」が設置されている。外国人留学生と日本人学生との交流、日本人学生チューター（ラウンジチューター）による勉学・生活支援及びパソコンの利用等、多様な活動ができ、留学生と日本人学生双方にとって有意義な場所となっている。また、ラウンジチューターが中心となって、夏は七夕まつり、冬はお正月イベントを開催するなど、学生主体の日本文化学習の場所にもなっている。

保健管理センターでは、外国人留学生及び研究者の健康管理に注力している。また、海外へ渡航する学生及び教職員に対しても準備も含めて種々の健康支援を提供している。

救命救急（AED）の案内

センターの利用案内（英語版）





Let's go

Annual Health Checkup 2026

2026.2.4 ~ 2026.2.18 including weekdays and national holidays

From this time, we have removed reservations and gender-specific spots so that students can access the health-checkup more easily for 10 days in the winter holidays and afternoons. To avoid congestion, students and times have been arranged based on campus location. Well-known, famous students whose names are written in the Roman alphabet may visit at any available time. We will also provide the "Wellness Clinic" to support those who can enjoy sports such as basketball and experience sports at health. Please see "Find out it."

This health checkup is for students who will be enrolled at Gifu University in the 2026 academic year.

Students who will graduate in March 2026 are not included.

After entering a graduate program should take the health checkup for new students in April.

No reservation required

Students whose names are written in the Roman alphabet can visit at any available time.

No gender-based time slots

Enter the Army base by sex.

Multiple access by registered system

For new and repeat students of undergraduate and graduate

Detachable

Those who wish to take sports can visit the "Wellness Clinic" for 10 days from Feb. 18 to 28.

Before Your Health Checkup

1. Check the date and time on the schedule.
2. Complete the health questionnaire on the Student Information System.
3. Bring up a same stamp from your health center and your arrival at the day of arrival, and bring it with us.
4. At the time, students of undergraduate and graduate: Graduate: the "Wellness & Sports Medicine Center 2026" and bring it to the day.

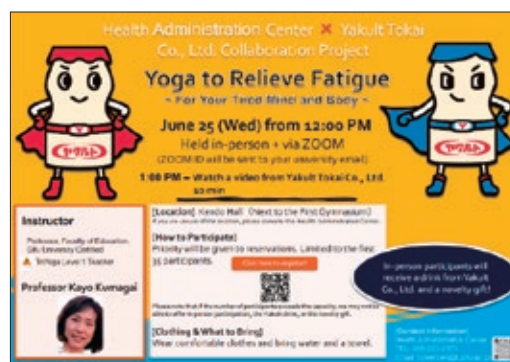
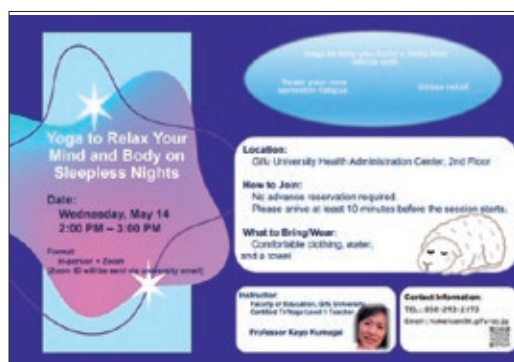
[Please take a look at the Health Health Management Center website](#)

Check it

If you have any question about the health checkup, please e-mail or contact the health management Center. If you will take your health checkup at our experience or other location, please contact the health management Center and submit a copy of your records.

The Health Management Center
TEL 0576-27-2200 (ext. 2200) / E-mail: healthcenter@gu.ac.jp

Wellness Center Office at the Center for Health Management



《令和 7 年度発行実績》

発行日	タイトル
2025.4.1.	We have published the 48th Annual Report of Health Administration Center (FY 2023) .
2025.4.3.	Yoga Class in April
2025.4.7.	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
2025.4.14.	Notification of Special Health Checkup in 2025
2025.5.1.	Yoga Class in MAY
2025.5.7.	Infection prevention measures No. 1
2025.5.7.	Infection prevention measures No. 2
2025.5.12.	Heatstroke Alert System Launched!
2025.5.20.	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
2025.6.5.	Event Announcement from the Wellness Room!
2025.6.13.	Yoga Class in June Health Administration Center × Yakult Tokai Co., Ltd. Collaboration Project!
2025.6.16.	June 16th Wellness Day
2025.6.25.	Yoga Class in July
2025.7.4.	Health Administration Center × Yakult Tokai Co., Ltd. Collaboration Project! We held a yoga class
2025.7.7.	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
2025.7.18.	Wellness Day Event Held!
2025.7.30.	Please prepare for vaccinations and a health check certificate before traveling abroad.
2025.7.31.	Director, Professor Mayumi Yamamoto, MD, PhD, MBA, to Appear on FM WATCH's 'Gifu no Kagayaki-bito' (78.5MHz) "
2025.7.31.	★ Special Yoga Class Event ★ Held on August 27!
2025.8.1.	Gifu University Health Administration Center 50th Anniversary Gifu University Symposium ～ University Wellness ～
2025.9.2.	Notice of Website Suspension for Maintenance
2025.9.9.	Special Event with the Health Administration Center × Professor Emeritus Nanako Harada from Saga University!
2025.9.10.	★ Special Yoga Class Event ★ Held on September 24!
2025.9.16.	Gifu University Health Administration Center 50th Anniversary Symposium Held
2025.9.25.	Compus -Communication Skills Enhancement Program-
2025.9.29.	Special Event Vol. 2 with the Health Administration Center × Professor Emeritus Nanako Harada from Saga University!
2025.10.1.	Yoga Class in October
2025.10.16.	【Call for Participants】 Gifu University Walking Challenge 2025
2025.10.16.	Notification of Special Health Checkup fall semester in 2025
2025.10.22.	[November Only] Wellness Room Point Card Campaign
2025.10.24.	[Prize Announcement!] Gifu University Walking Challenge 2025
2025.11.4.	November Yoga Class – Collaboration with the Wellness Point Card Program
2025.11.5.	Call for Exhibitors: Wellness EXPO
2025.11.13.	The number of influenza infections is increasing.
2025.11.16.	Compus -Communication Skills Enhancement Program- : Let's think about LOVE
2025.12.3.	December Yoga Class
2025.12.25.	Nutritional Advice service for New Second-Year Students
2025.12.26.	Yoga Class on January
2025.12.26.	Annual Health Checkup are changing!
2026.1.9.	The Walking Challenge 2025 was held
2026.1.27.	Enhancing Understanding of Support for special needs in Universities — Introduction to FD Videos for Faculty and Staff
2026.3.3.	We Held the Wellness EXPO!
2026.3.19.	We have published the 49th Annual Report of Health Administration Center (FY 2024).

(2) 外国人留学生・研究者来日時に質の高い健康診断を実施し、その受診を徹底している

外国人留学生・研究者には、来日後速やかに、本学新入生と同じ質の高い健康診断とその結果に基づく健康管理指導を提供している。特に、全員に麻疹、風疹、流行性耳下腺炎及び水痘の抗体検査を実施し、抵抗力（抗体価）が不十分な者には追加予防接種を積極的に勧奨している。結核蔓延国から来日する者もいるので、来日直後の胸部X線写真撮影は義務づけるとともに、所見があれば速やかに精密検査の手配を支援している。生来初めて健康診断を受けるという留学生も少なくないので、健康診断の目的や結果について英語で丁寧に説明している。

(3) 「Health Management on Campus」の提供

外国人留学生・研究者全員に英語の健康啓発本を来日直後に無料で提供し、自己健康管理、健康意識の向上につなげている。外国人留学生に対しては同伴家族の案件も含め幅広い健康相談に対応している。

(4) 海外渡航に向けた「健康の手引き」を用いた渡航時の健康管理指導

海外へ渡航する学生及び教職員に向けて、海外渡航時に健康面で注意すべき事項をわかりやすくまとめたパンフレットを提供し、予防接種準備を含め渡航先に応じた健康管理について個別に面談指導している。



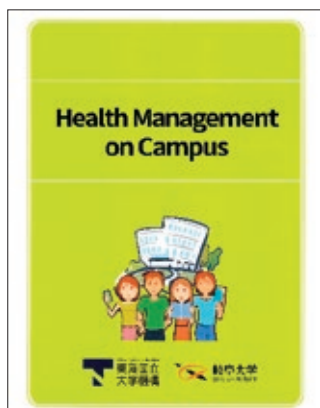
(海外留学健康の手引き2025年4月第五版：<https://hoken.gifu-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/03/tebiki2025.pdf>)

(5) 外国人受け入れ教職員向け冊子「International Students(海外からの留学生)への健康管理の手引き」の提供

教職員の資質向上のために、留学生の健康管理支援に必要な知識とスキル情報について詳述された冊子をホームページで公開すると同時に、適宜、校内教職員に提供し、留学生の支援環境向上に役立てている。



(2020年9月第一版：https://hoken.gifu-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/05/Guide_for_International_Students2020.pdf)





2. 海外大学・機関等との学術・学生交流協定

本学では、組織的・計画的な研究者・学生の交流及び教育研究に関する情報交換等を推進するため、積極的に大学間学術交流協定を締結している。2026年3月31日現在、20ヵ国51大学との大学間学術交流協定を締結しているほか、各部局においても様々な学術交流協定を締結している。

一覧はⅣ. 資料に掲載し、本年度に新規締結した協定大学等の詳細を以下に記載する。

本年度に新規締結した協定大学等

大学間

令和7年度に新規締結した学術交流協定大学等

令和7年度に新規締結した学術交流協定大学等は無し

令和7年度に学術交流協定の更新を完了した大学等

	協定大学名	国・地域	最新発効日	有効期間
1	リール大学	フランス	2025年4月2日	5年間
2	南フロリダ大学	アメリカ	2025年4月4日	5年間
3	電子科技大学	中国	2025年6月16日	5年間
4	インド工科大学	インド	2025年6月23日	5年間
5	シドニー工科大学	オーストラリア	2025年7月21日	5年間
6	内蒙古農業大学	中国	2025年8月8日	5年間
7	ノーザンケンタッキー大学	アメリカ	2025年10月1日	5年間
8	ボゴール農科大学	インドネシア	2025年12月2日	5年間
9	ブラヴィジャ大学	インドネシア	2026年2月23日	5年間
10	同済大学	中国	2026年3月16日	5年間

令和7年度に大学間学術交流協定を終了した大学等

令和7年度に協定終了した学術交流協定大学等は無し

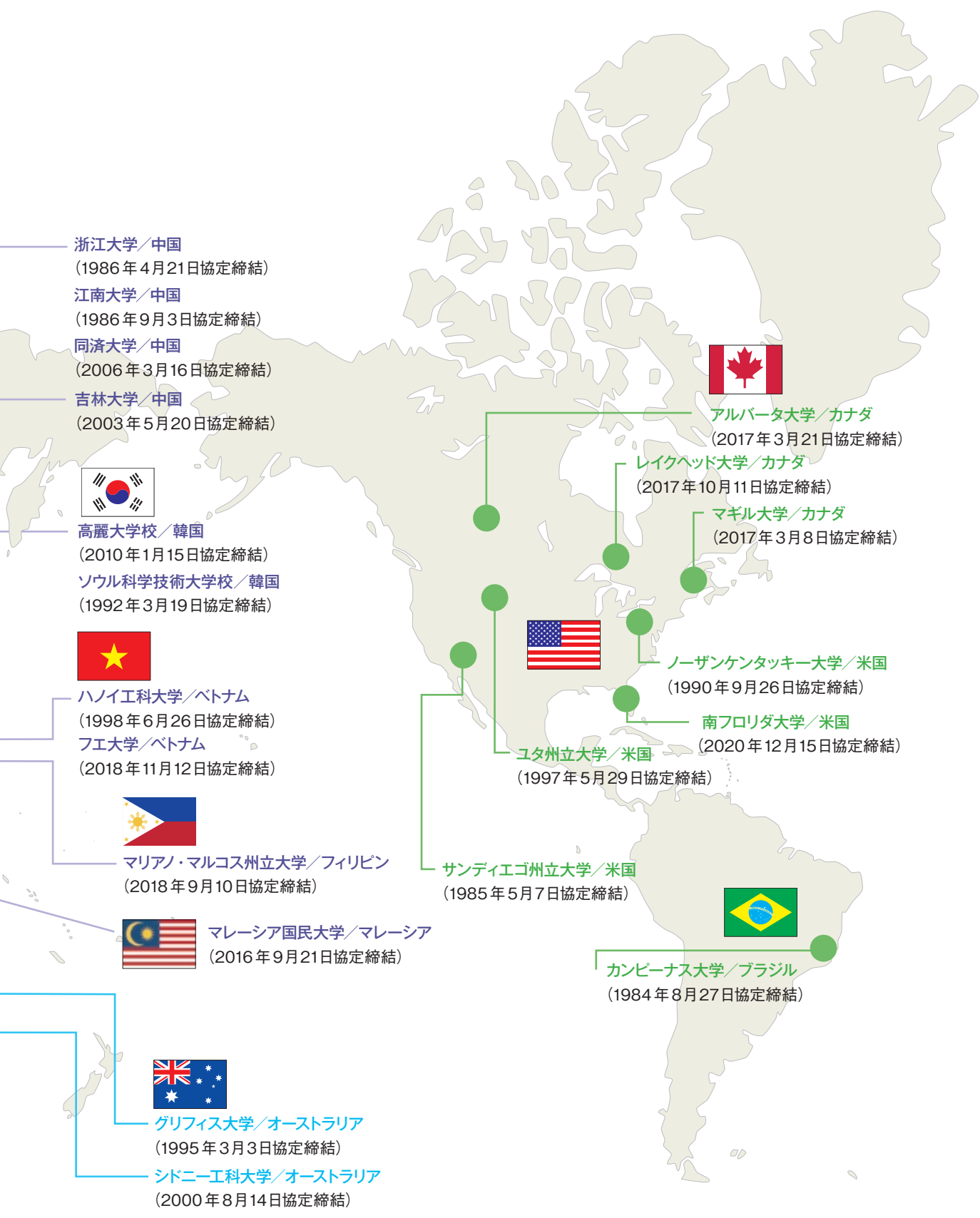
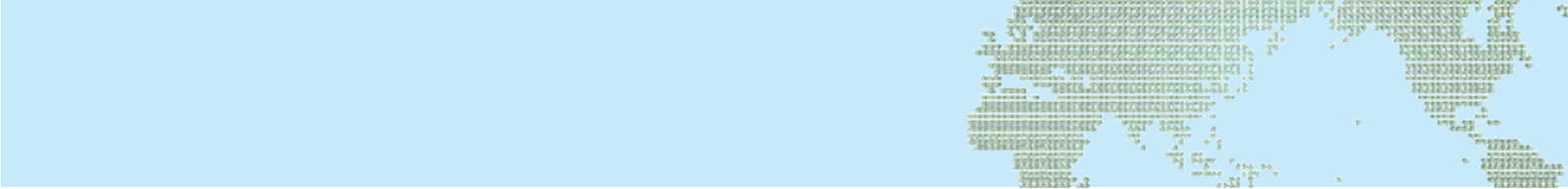
部局間

令和7年度に新規に締結した学術交流協定大学等

部局	締結先	国・地域	締結日
糖鎖生命コア研究所	マッコーリー大学	オーストラリア	2025.4.1
糖鎖生命コア研究所	グライコネット	カナダ	2025.5.27
医学系研究科	サマルカンド国立医科大学	ウズベキスタン	2025.8.25

大学間学術交流協定締結大学・機関マップ (2026年3月31日現在 20ヵ国51大学)





部局間学術交流協定締結大学・機関マップ (2026年3月31日現在 29ヵ国1地域61学部)



表示アイコン	協定部局	表示アイコン	協定部局
	教育学部		連合創薬医療情報研究科
	地域科学部		糖鎖生命コア研究所
	医学部		保健管理センター
	工学部		インフラマネジメント技術研究センター
	応用生物科学部		複合材料研究センター
	連合農学研究科		地域連携スマート金型技術研究センター
	連合獣医学研究科		科学研究基盤センター
	共同獣医学研究科		地方創生エネルギーシステム研究センター



 山西師範大学／中国
 浙江大学 医学院／中国
 南京師範大学 エネルギー機械工学院／中国
 中国科学院水利部 水土保持研究所／中国
 中国水利水电科学研究院 岩土工程研究所／中国



 忠北大学校 医学部／韓国
 全南大学校 工学部／韓国
 慶北大学校 工学部／韓国
 忠南大学校 工学部／韓国
 柳韓大学校 工学系列／韓国
 国立獣医科学検疫院 獣医科学研究所／韓国
 ソウル大学校 医科大学／韓国



 台湾国立高雄科技大学 先端金型研究開発センター／台湾
 長庚大学 工学部／台湾
 国立中央大学 文学院／台湾



 グライコネット／カナダ

 シカゴ大学 医学部／米国



 南フロリダ大学 医学学群／米国

 ハワイ大学 医学部／米国



 チュイロイ大学／ベトナム
 基盤 タイビン医科薬科大学 医・薬科学技術センター／ベトナム



 南太平洋大学 自然科学・工学・環境学群／フィジー



 ブルネイ・ダルサラーム大学 理学部／ブルネイ・ダルサラーム



 東ティモール国立大学 工学部／東ティモール



 マツコーリー大学／オーストラリア

外国人留学生在籍数

5月1日現在の本学の外国人留学生在籍者数は275名（総学生数7,473名の3.68%）で、前年5月1日現在の294名よりも19名減少した。

出身国別に見た場合、上位3カ国は1位中国101名（37%、前年度－8名）、2位インドネシア48名（17%、前年度－9名）、3位マレーシア12名（4%、前年度－4名）であった。地域別に見た場合、88.7%がアジアからの学生であり、次いでアフリカ（5.5%）、ヨーロッパ（2.9%）、という内訳となっている。

学部・研究科別内訳

2025年5月1日現在

	学部		修士 専門職学位		博士		日研究生	その他	合 計
	正規	非正規	正規	非正規	正規	非正規			
教育学部／教育学研究科（専門職学位・修士）	1	0	0	6					7
地域科学部／地域科学研究科（修士）	8	7	17	3					35
医学部（医学科・看護学科）／医学系研究科（博士）	6	2			5	0			13
工学部／工学研究科（博士）	15	1			62	3			81
応用生物科学部	3	1							4
社会システム経営学環	0	2	2	0					4
自然科学技術研究科（修士）			53	3					56
共同獣医学研究科（博士）					4	0			4
連合農学研究科（博士）					53	0			53
連合創薬医療情報研究科（博士）					4	0			4
高等研究院								0	0
日本語・日本文化教育センター							4	10	14
合 計	33	13	72	12	128	3	4	10	275

その他は、学部・研究科以外所属の非正規生（日研究生除く）

連合大学院別内訳

研究科	正規		非正規	
	学生数	内 配置大学が 岐阜大学	学生数	内 配置大学が 岐阜大学
共同獣医学研究科（博士）	4	4	0	0
連合農学研究科（博士）	53	38	0	0
連合創薬医療情報研究科（博士）	4	4	0	0
合 計	61	46	0	0

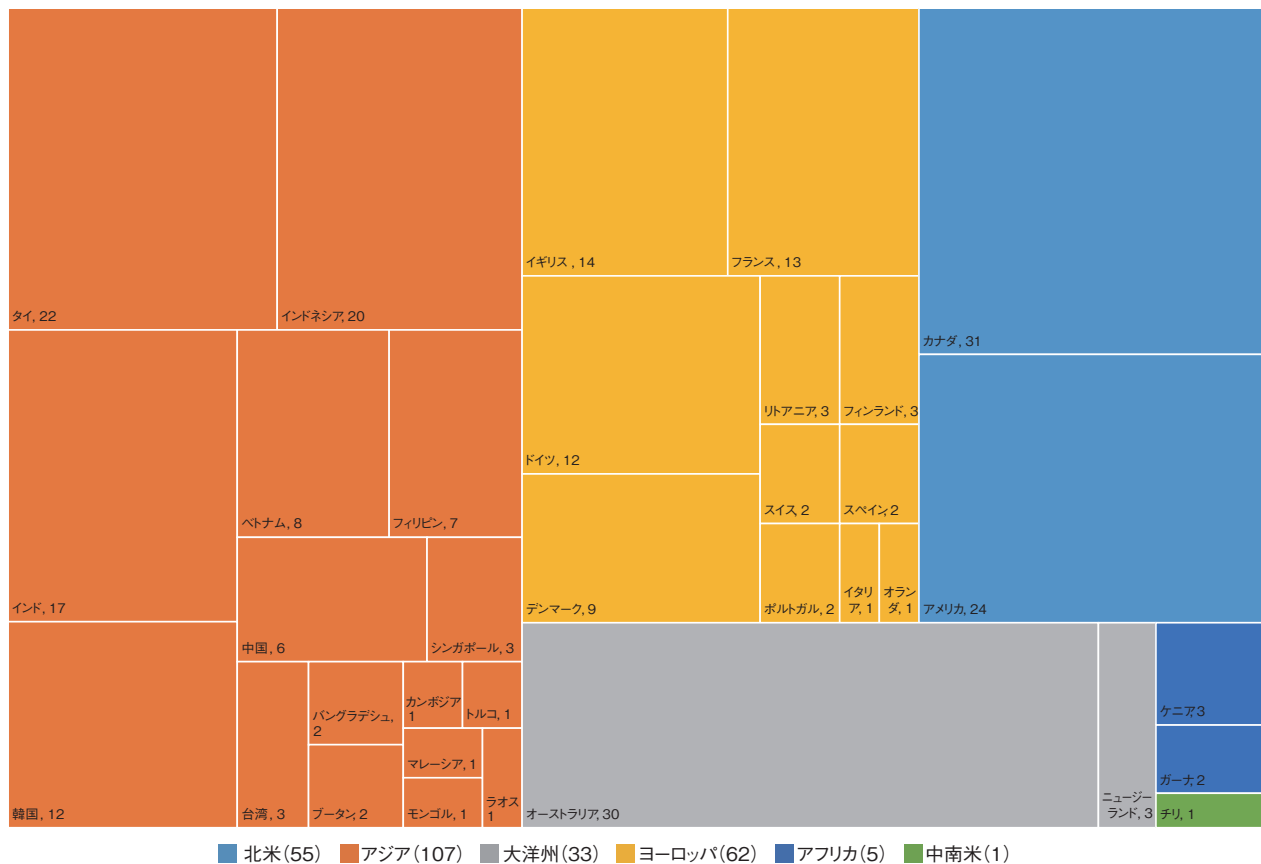
本学学生の海外派遣実績

本学学生の大学を通じた海外渡航実績は以下のとおりである。なお、岐阜大学基金等の海外渡航における助成金においては、私事渡航に対しても申請があり採択された場合、支援を行っている。

表1 本学学生の海外渡航者数（プログラム別・延べ数）

種別			渡航者数
全学	大学間学術交流協定に基づく交換留学		6
	短期英語研修プログラム (春季)	アルバータ EST プログラム	4
		アルバータ ESL プログラム	6
		アルバータ EFN プログラム	1
	短期英語研修プログラム (夏季)	アルバータ ESL プログラム	18
		グリフィス ESL プログラム	19
		カルフォルニア大学デービス校 EST プログラム	2
		カルフォルニア大学サンディエゴ校 ESL プログラム	1
	世界展開力強化事業	スプリングスクールプログラム	10
		グローバルエキスパートプログラム	1
アイデアソンプログラム		3	
次世代地域リーダー育成プログラム・グローバルリーダーコース	フエ大学・学生交流プログラム	6	
部局	教育学部・教育学研究科	総合文化海外実習	0
		部局間学術交流協定に基づく交換留学	0
	地域科学部	部局間学術交流協定に基づく交換留学	0
	医学部	海外臨床実習	18
		医学生交流プログラム	9
		看護学科・短期派遣プログラム	5
	工学部・自然科学技術研究科・工学研究科	協定校短期派遣プログラム	6
	応用生物科学部・自然科学技術研究科	国際獣医学インターンシップ演習	3
		ジョイント・ディグリープログラム	3
		タイ・短期派遣プログラム	13
	連合農学研究科	ジョイント・ディグリープログラム	0
その他	研究留学（トビタテ留学 JAPAN・バローV ドラッグ奨学金含む）		9
	学会・国際大会		53
	調査・フィールドワーク		18
	個人留学		7
	研修		25
	インターンシップ		5
	名古屋大学主催・短期派遣プログラム		7
	中国名古屋領事館主催・訪中団プログラム		5
合計			263

図1 本学学生の海外渡航先（延べ数）



本学学生の渡航先地域（図1）としては、昨年度に比べアジアが13名、ヨーロッパが21名、渡航者が増加した。今年度は、アジア地域においてタイで短期研修プログラムを実施したことにより、同国への渡航者数が増加し、アジアが引き続き本学における最大の渡航エリアとなった。

ヨーロッパ地域では、ドイツ、フランス、デンマークへの研修を目的とした学生の渡航が増加傾向にあった。

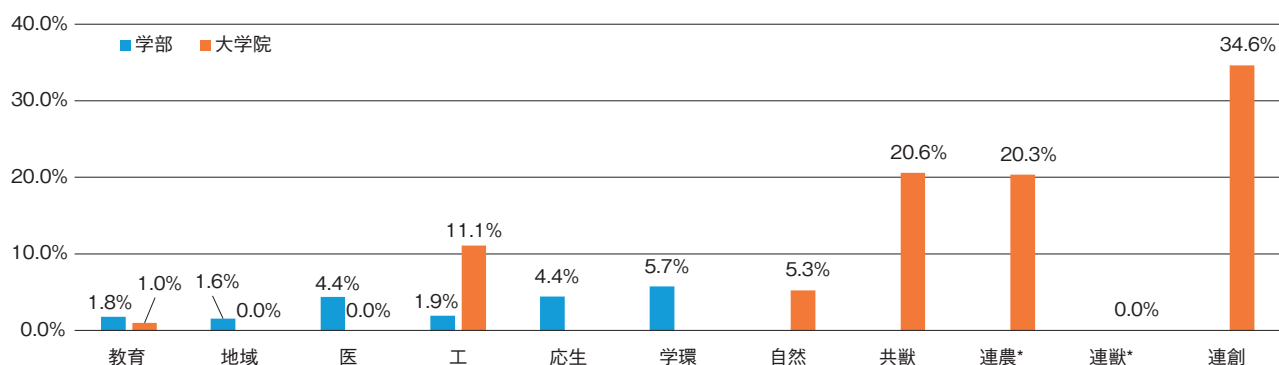
また、新たな渡航先として、アジア地域ではカンボジア、トルコ、ブータンが加わり、中南米地域ではチリが新規渡航先として追加された。

表2 本学学生の海外渡航者数（部局別・延べ数）

部局	学部生数	大学院生数	全学部生数	全大学院生数
教育学部 / 教育学研究科（専門職学位・修士）	17	1	956（－6）	99（＋7）
地域科学部 / 地域科学研究科（修士）	7		448（－1）	25（－6）
医学部（医学科・看護学科）/ 医学系研究科（修士・博士）	43		975（＋4）	277（＋4）
工学部 / 工学研究科（博士）	43	13	2248（＋31）	117（＋6）
応用生物科学部	39		880（－4）	
社会システム経営学環 / 社会システム経営学院（修士）	7		122（－3）	6（＋6）
自然科学技術研究科（修士）		53		1007（＋3）
共同獣医学科（博士）		7		34（＋9）
連合農学研究科（博士）		24		118（－5）
連合獣医学研究科（博士）				2（－1）
連合創薬医療情報研究科（博士）		9		26（＋3）

全学部生数・全大学院生数は2025年岐阜大学概要の数値を使用
（ ）内は前年度からの増減を示す

図2 本学学生の海外渡航率（部局別）



全学部生数・全大学院生数は2025年岐阜大学概要の数値を使用

* 連農及び連獣は全配置大学の学生をカウント

今年度の本学学生の海外渡航率（図2）においては、昨年度より社会経営学環が0.9%、工学研究科が6.6%、連合農学研究科2.4%、連合創薬医療情報研究科が4.2%増加した。

全体的に渡航者数が増えており、コロナ禍以前の渡航者数に戻りつつある。



トビタテ！留学 JAPAN 新・日本代表プログラムとは？

文部科学省は、2014年度より実施してきた「日本代表プログラム」の基本理念やコミュニティを受け継ぎつつ、より発展的に進化した事業として、将来、「自ら社会に変革を起こしていくグローバルリーダー」として日本の未来を創る人材を育成する新たなプログラム「新・日本代表プログラム」を開始しました。本学の学生も数多く、この制度を利用し、世界に旅立っています。

本学の採用実績は次のとおりです。

「日本代表プログラム」（平成26年度～令和4年度）

平成26年度	2014年9月～2015年3月	メルボルン大学	オーストラリア
	2014年12月～2015年9月	メルボルン大学	オーストラリア
	2014年9月～2015年9月	ランガラカレッジ	カナダ
平成27年度	2015年9月～2016年3月	ベルリン自由大学	ドイツ
平成28年度	2016年10月～2017年9月	ワーゲニンゲン大学、 ルーヴァンカトリック大学	オランダ、ベルギー
	2016年10月～2017年9月	テュレーン大学	アメリカ
	2016年10月～2017年9月	国立衛生研究所	アメリカ
	2016年10月～2017年3月	シンガポール国立大学	シンガポール
平成29年度	2017年9月～2018年8月	アルバータ大学	カナダ
	2017年11月～2018年9月	デュボン小児病院	アメリカ
平成30年度	2018年4月～2018年6月	シドニー大学	オーストラリア
	2018年9月～2018年10月	ミネソタ大学ツインシティー校	アメリカ
	2018年9月～2019年6月	イエナブラン教育協会、 ヨーク大学附属語学学校、 Eric Hamber Secondary School	オランダ、カナダ
	2018年9月～2019年9月	スイス連邦工科大学ローザンヌ校	スイス
	2018年10月～2019年9月	国立衛生研究所	アメリカ
令和元年度	2019年9月～2020年3月	スウェーデン王立工科大学	スウェーデン
令和2年度	2022年1月～2022年12月	農場フィールドワーク、 ヘルシンキ大学等	フィンランド、フランス、 イギリス、スペイン
	2022年2月～2023年2月	ロイヤルメルボルン工科大学	オーストラリア
	2022年4月～2023年3月	ザンビア大学	ザンビア
	2022年1月～2023年1月	アイオワ州立大学	アメリカ
	新型コロナウイルス感染症の影響により採用辞退	国立衛生研究所	アメリカ
	新型コロナウイルス感染症の影響により採用辞退	国立神経学脳神経外科学病院	イギリス
令和3年度	2022年3月～2023年3月	スイス連邦工科大学ローザンヌ校	スイス
	新型コロナウイルス感染症の影響により採用辞退	バイトダンス	シンガポール

「新・日本代表プログラム」（令和5年度以降）

令和5年度	2024年1月～2024年4月	オックスフォード大学、 南フロリダ大学	イギリス、アメリカ
令和6年度	2024年10月～2025年9月	ノッティンガムトレント大学、 上海交通大学	イギリス、中国

本学教職員派遣実績（令和7年度海外渡航者数調べ（延べ人数））

部局名	出張	研修	合計
教育学部・教育学研究科	24（3）	1（0）	25（3）
地域科学部・地域科学研究科	6（1）	0（0）	6（1）
医学部・医学系研究科	59（15）	3（0）	62（15）
医学部附属病院	68（6）	4（0）	72（6）
工学部・工学研究科	138（43）	1（0）	139（43）
応用生物科学部	39（11）	4（1）	43（12）
社会システム経営学環	7（0）	0（0）	7（0）
自然科学技術研究科	0（0）	0（0）	0（0）
共同獣医学研究科	0（0）	0（0）	0（0）
連合農学研究科	2（1）	0（0）	2（1）
連合獣医学研究科	0（0）	0（0）	0（0）
連合創薬医療情報研究科	16（9）	0（0）	16（9）
学術研究・産学官連携統括本部	2（0）	1（0）	3（0）
高等研究院	30（2）	0（0）	30（2）
糖鎖生命コア研究所	26（3）	5（4）	31（7）
地域協学センター	5（2）	0（0）	5（2）
教育推進・学生支援機構	0（0）	0（0）	0（0）
保健管理センター	5（2）	1（1）	6（3）
岐阜大学運営局	0（0）	0（0）	0（0）
グローバル推進機構	9（8）	1（1）	10（9）
合計	436（106）	21（7）	457（113）

うち（ ）内は協定大学

外国人研究者・来訪者受入れ実績（令和7年度外国人研究者・来訪者受入数調べ（延べ人数））

部局名	研究者	来訪者	国（研究者）	国（来訪者）	合計
教育学部・教育学研究科	0（0）	0（0）			0（0）
地域科学部・地域科学研究科	1（0）	0（0）		中国	1（0）
医学部・医学系研究科	0（0）	2（2）		アメリカ	2（2）
医学部附属病院	0（0）	4（0）		韓国	4（0）
工学部・工学研究科	5（2）	24（5）		インド、インドネシア、カナダ、スイス、中国、ドイツ、マレーシア、ラオス、リトアニア	29（7）
応用生物科学部	2（0）	5（3）		インド、タイ、デンマーク、バングラデシュ、ベトナム	7（3）
社会システム経営学環	0（0）	0（0）			0（0）
自然科学技術研究科	0（0）	0（0）			0（0）
共同獣医学研究科	0（0）	0（0）			0（0）
連合農学研究科	0（0）	21（21）		インド、インドネシア、タイ、ベトナム、中国	21（21）
連合獣医学研究科	0（0）	0（0）			0（0）
連合創薬医療情報研究科	0（0）	0（0）			0（0）
学術研究・産学官連携統括本部	0（0）	1（0）		ドイツ	1（0）
高等研究院	0（0）	8（1）		アメリカ、インドネシア、台湾、ドイツ	8（1）
糖鎖生命コア研究所	0（0）	4（3）		アメリカ、フランス、中国	4（3）
地域協学センター	0（0）	0（0）			0（0）
教育推進・学生支援機構	0（0）	0（0）			0（0）
保健管理センター	0（0）	0（0）			0（0）
岐阜大学運営局	0（0）	0（0）			0（0）
グローバル推進機構	12（0）	42（40）		アメリカ、インド、ウズベキスタン、タイ、マレーシア	54（40）
合計	20（2）	111（75）			131（77）

うち（ ）内は大学間・部局間学術交流協定大学

国際協力活動（JICA 事業）

本学の理念である「学び、究め、貢献する」に基づき、グローバルな視点においても社会貢献、また、有為な人材育成を行うため、積極的な国際協力活動を行っている。これまで本学が行ってきた国際協力機構（JICA）による専門家派遣、外国人研修員受入れ及び学位課程就学者受入れ等について、今後も引き続き協力を行うと同時に、海外の大学及び関係機関等と国際的なネットワークを構築し、教育研究の国際化を図ることで、世界に開かれた大学を目指す。

本年度に実施された国際開発協力一覧（JICA 事業）

種別	部局	国名	プロジェクト名	人数	協力期間
学位課程就学者受入	工学研究科	チリ	道路アセットマネジメント技術の中核人材育成	1名	2023.4.1～2026.3.31
		ラオス	道路アセットマネジメント技術の中核人材育成	1名	2024.4.1～2027.3.31
		東ティモール	科学技術イノベーション人材育成	1名	2023.10.1～2027.3.31
	自然科学技術研究科	バングラデシュ	食料安全保障のための農学ネットワーク (Agri-Net)	1名	2025.10.1～2027.9.30
受託研修員受入	工学部	東ティモール	東ティモール国立大学工学系大学院設立能力強化 電気・電子工学	4名	2025.6.17～2025.7.24
			東ティモール国立大学工学系大学院設立能力強化 機械工学	3名	
			東ティモール国立大学工学系大学院設立能力強化 情報工学	5名	
専門家派遣	工学部	東ティモール	東ティモール国東ティモール国立大学工学系大学院設立支援アドバイザー	1名	2025.8.16～2025.8.31
				1名	2025.8.23～2025.8.31
				1名	2025.8.30～2025.9.14
				1名	2025.9.6～2025.9.14
				1名	2026.3.21～2026.3.29
				1名	2026.3.21～2026.3.29
				1名	2026.3.21～2026.3.29
				1名	2026.3.21～2026.3.29
	連合農学研究科	スリランカ	産業発展のための工学人材強化プロジェクト	1名	2025.11.23～2025.11.30
			工学系教育強化	1名	2026.3.1～2026.3.8
			ジャフナ大学農学部による乾燥地域農業の教育・研修能力向上プロジェクト	1名	2025.11.29～2025.12.13

JICA 東ティモール事業

『東ティモールでは1999年8月の独立を問う直接投票後の混乱により、多くの住民が避難を余儀なくされ、教育機関を含む物的インフラの7割以上が破壊・使用不可能となるなど甚大な被害を被った。東ティモール人材の育成の観点から、インドネシア時代の旧東ティモール・ポリテクニクを母体として工学部に電気／電子工学科、機械工学科、土木工学科を設置したが、東ティモールでは高等技術教育体制の整備・運営に係る経験・知識が不足しており、日本に支援を要請してきた。』

日本としては、東ティモールの支援要請に応え、2001年より東ティモール大学工学部各学科のカリキュラムの策定、緊急無償資金協力による施設復旧・機材供与、電気・電子工学科に対して実習指導の専門家派遣を行ってきたところである。』¹⁾

本学は2003年から、JICA 東ティモール事業「JICA 東ティモール大学工学部支援プロジェクト」、さらに2011年からは「東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクト」²⁾、2016年からは同プロジェクト第2フェーズ³⁾、2023年からは「東ティモール国立大学工学系大学院設立能力強化」、「東ティモール国立大学工学系大学院設立支援アドバイザー」の協力機関として、同国を支援している。

- 1) 東ティモール大学工学部支援プロジェクト
(<https://www.jica.go.jp/oda/project/0601585/index.html>)
- 2) 東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクト
(<https://www.jica.go.jp/oda/project/1000106/index.html>)
- 3) 東ティモール国立大学工学部能力向上プロジェクトフェーズ2
(<https://www.jica.go.jp/oda/project/1600474/index.html>)

1)



2)



3)



短期研修プログラム

【短期研修プログラム（派遣）】

短期研修プログラム（派遣）は、その国の言語や文化を集中的に勉強するプログラムであり、短期間海外で生活することで国際感覚を高め、言語力を向上させ、今後の国際交流・海外留学等への契機となることを目的に実施している。令和7年度については、夏にカリフォルニア大学サンディエゴ校（アメリカ）において、Conversation and Fluency Program が開催され、本学からは初めて1名の学生が参加した。

大学名	グリフィス大学（オーストラリア）
プログラム名	English as a Second Language（ESL）
プログラム実施期間	8月29日～9月28日 ※移動日を含む
内容	一般英語研修
参加人数	19名

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English as a Second Language（ESL）
プログラム実施期間	8月30日～9月28日 ※移動日を含む
内容	一般英語研修
参加人数	18名

大学名	カリフォルニア大学デービス校（アメリカ）
プログラム名	English for Science and Technology（EST）
プログラム実施期間	8月8日～9月5日
内容	実践科学英語研修
参加人数	2名

大学名	カリフォルニア大学サンディエゴ校（アメリカ）
プログラム名	Conversation and Fluency Program
プログラム実施期間	9月2日～26日
内容	一般英語研修
参加人数	2名（うち名古屋大学学生1名）

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English for Science and Technology（EST）
プログラム実施期間	2026年2月15日～3月22日 ※移動日を含む
内容	実践科学英語研修
参加人数	5名（うち名古屋大学学生1名）

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English for Nursing（EFN）
プログラム実施期間	2026年2月15日～3月22日 ※移動日を含む
内容	看護学分野の英語研修
参加人数	1名

大学名	アルバータ大学（カナダ）
プログラム名	English as a Second Language（ESL）
プログラム実施期間	2026年2月15日～3月22日 ※移動日を含む
内容	一般英語研修
参加人数	6名

【サマースクール（夏期短期語学研修：受入）】

令和7年度の岐阜大学サマースクール（受入）は、6月中旬から7月中旬までの期間で実施した（日本語及び日本文化の教育担当は日本語・日本文化教育センター）。本プログラムで養成を目指す人材は、日本を理解し応援してくれる海外の人々である。日本語授業はもちろんのこと、本物に触れる日本文化体験（美濃紙すき、日本刀鍛冶見学体験・能楽ワークショップ等）、地域性を生かした学外活動（郡上市における文化交流やホームステイ等）、日本人学生との交流機会等を提供している。本プログラムは今回の実施が36回目で、岐阜大学の協定大学のうち4校から合計13名の学生が参加した。

〔成果報告〕

サマースクールレポート：グローバル推進機構 HP に掲載

https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/summer_school_program/



【Collaborative Video Making Program】

ジョイント・ディグリープログラムの相手大学であるインド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学、そして本学の3大学の学生が参加するオンライン交流事業 Collaborative Video Making Program (CVMP) を実施した。CVMP は令和2年度から毎年開催しており、令和7年度で6回目の開催となる。

このプログラムでは、3大学の学生が3グループに分かれ、“Unique points that can be identified by comparing student life” というテーマのもと、動画作品の共同制作を行った。

そして Final Competition を、12月11日に Zoom Webinar 及び OKB 岐阜大学プラザでの対面のハイブリットにて開催した。学生が制作した動画作品の発表を行い、特別審査員が講評を行った。最後には、特別審査員による採点及び視聴者投票が行われ、グループ3の作品「Our Universities, Our Stories」が最優秀作品に決定した。

また、本プログラムで制作された動画作品は、GU-GLOCAL Channel から視聴できる。



対象大学	インド工科大学グワハティ校（IITG）、マレーシア国民大学（UKM）
実施期間	8月6日～12月11日※
参加人数	9名：IITG 2名、UKM 2名、岐阜大学5名

※終了後にアンケートを実施（翌年1月末締切）

〔GU-GLOCAL Channel〕

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLrNWL5oYxiK9aHppLz9nEMlRcTuARbk3c>



〔CVMP Web サイト〕

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/videomaking/>



【Winter School（受入）】

ジョイント・ディグリープログラムの相手大学であるインド工科大学グワハティ校（IITG）、マレーシア国民大学（UKM）の学生を本学にて受け入れる、ウィンタースクールを実施した。第9回目となる本年は、12月3日～18日にかけて実施し、IITG から7名、UKM から2名の学生が来学した。

本年度は「日本の食品を科学する」というテーマにて開催し、2週間という短い期間に、参加学生らは企業や日本学生との交流、研究活動、日本文化体験等のプログラムを行った。

最終日の12月18日には本プログラムを通して学んだことを発表する最終報告会を執り行い、ポスタープレゼンテーションにて発表を行った。



対象大学	インド工科大学グワハティ校（IITG）、マレーシア国民大学（UKM）
実施期間	12月3日～18日
参加人数	9名：IITG 7名、UKM 2名

[ウィンタースクールレポート]

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/folder1/>



【Spring School Program（派遣）】

全学を対象とした短期派遣プログラムであるスプリングスクールプログラムを実施した。本プログラムはジョイント・ディグリープログラム（JDP）の相手大学であるインド工科大学グワハティ校（IITG）へ2週間程滞在するプログラムである。2026年3月2日から14日にかけて第5回スプリングスクールプログラムが開催され、本学学生10名が参加した。

期間中には、アッサム州を代表する国立公園見学や民俗博物館などの見学を通じて、多様性に富むインド文化を学ぶ機会が提供されたほか、インド国内で人気のある菓子等を製造する工場を見学した。学内では、デザイン学科での粘土細工のワークショップや、IITG での JDP 関連学科を中心としたラボツアーが連日開催された。さらに、IITG と岐阜大学が共同で開催したジョイント・ディグリーシンポジウム2026にも参加した。本プログラムを通して現地学生との交流を深め、最終日には、英語でのポスタープレゼンテーションを見事にこなし、修了証書を受け取った。



対象大学	インド工科大学グワハティ校（IITG）
実施期間	2026年3月2日～14日
参加人数	10名

[Spring School Program Web サイト]

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/springschool/>



3. 国際交流活動

国際協働教育・地域国際化関連

4月4日

岐阜大学・インド工科大学グワハティ校国際連携食品科学技術専攻（修士課程）の学生（岐阜大学・IITG）が本学での勉学を開始



4月4日、岐阜大学・インド工科大学グワハティ校 国際連携食品科学技術専攻（修士課程）の新年度ガイダンスが行われ、岐阜大学を主大学とする学生3名とインド工科大学グワハティ校（IITG）を主大学とする学生4名が本学での勉学を開始した。

岐阜大学を主大学とする学生3名は本年7月中旬まで岐阜大学での講義履修と研究活動を行ったのち、7月下旬からはIITGでの留学（5か月）を開始する。日印学生は共に顔を合わせて学び合い、国際共同学位取得という共通目標に向かって切磋琢磨していく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/000944.html>



5月20日

JDP 学生向けに Glocal Expert Program 科目「グローバル化実践」を開講



5月20日、GEPに参加している日本とインドのJD学生を対象としたGlocalization Practice（グローバル化実践）の講義を実施した。本講義は、グローバル推進機構の三輪真一特任教授が講師となり、テーマを「Introduction of Japanese Industry」として、2部構成で実施された。第1部では、「Characteristics of Japanese Industry」として、「Precision and Quality」「Innovation and Technology」「Kaizen（Continuous Improvement）」「Resource Scarcity and Efficiency」「Export-Oriented Growth」といった観点から日本産業の特性の講義があり、第2部では、日本企業の具体的な事例として、特に東海地域と信州に焦点を当てた内容の紹介があった。愛知・岐阜・三重・静岡・長野の地理的・経済的特徴が紹介され、自動車会社をはじめとする主要企業の集積、交通網の発達、そしてセラミックス産業の歴史的発展などが取り上げられた。講義では、学生たちはいくつかのグループに分かれ、日常生活における高付加価値製品の特徴や産業ごとの価値創出の違いについて、「製品の単価（gあたりの価格）」に関する経済分析を行い、その後、各グループの視点や分析結果について、発表と質疑応答が行われた。

本講義を通じ、日本企業の地域性や産業の多様性について理解を深めるとともに、異なる文化的背景を持つ学生同士が協働して議論を行うことで、学生の異文化理解と課題化理解が深まることが期待される。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/collaboration/information/001002.html>



12月4日～5日 岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2025

12月4日、5日に、岐阜大学 糖鎖生命コア研究所 (iGCORE) ほか学内各会場において、「岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2025」を開催した。

メインシンポジウムに先立ち、12月4日に行われた学術セッションでは、インド工科大学グワハティ校 (IITG) 及びマレーシア国民大学 (UKM) の講師陣による学術講演が行われた。

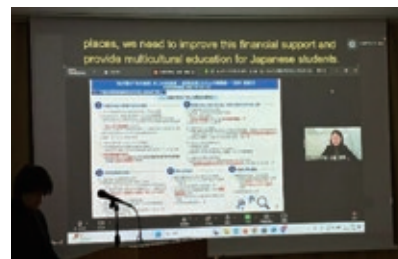
12月5日に開催された東海国立大学機構主催のメインシンポジウムには、対面およびオンラインで95名が参加した。冒頭、松尾清一機構長と吉田和弘大学総括理事・副機構長（岐阜大学長）が開会挨拶を行い、続いて文部科学省 高等教育局の古屋圭織専門官より「留学生 Mobility の推進及び大学の国際化について」と題した基調講演を行った。午後には竹資源を活用したバイオマス事例など産官学金連携の発表や意見交換が実施され、展示ブースも含め国際化と地域連携の取り組みが広く紹介された。

当日は、メイン会場である iGCORE のほか、図書館エントランスホールでも地元企業や文化紹介のブース展示が開催され、海外からの来賓も含めた多くの来場者が訪れるなど、終日に渡り充実したシンポジウムとなった。

今後同シンポジウム開催等の活動を通じ、JDP を中軸とした地域の国際化推進に努めていく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/region/information/001036.html>

<https://www.jdsymposium.jp/>



留学推進・国際企画関連

4月23日 2025年度夏の短期研修プログラム説明会

4月23日、アルバータ大学 ESL、グリフィス大学 ESL、カリフォルニア大学サンディエゴ校 ESL、デービス校 EST、マレーシア国民大学短期研修プログラムを対象とした説明会を開催した。学生73名が参加し、夏期休暇を利用し短期留学を経験できる本プログラムへ興味を示していた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000930.html>



4月16日
11月19日

海外留学フェア2025 春・秋

4月16日、「海外留学フェア2025春」を開催し、44名が参加した。そして、11月19日、「海外留学フェア2025秋」を開催し、15名が参加した。本フェアでは、本学の留学プログラムや支援制度に関する説明、英語能力試験（TOEFL 及び IELTS）の概要の説明や、短期英語研修プログラム、交換留学及び学部等派遣プログラムなどにより留学した学生から、留学経験に基づく発表等が行われた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000942.html>

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/001029.html>



7月2日

2025年度海外渡航危機管理オリエンテーション

7月2日、「2025年度 海外渡航時の危機管理オリエンテーション」を開催し、75名が参加した。本オリエンテーションは、留学や海外旅行を予定している学生・教職員などを対象とし、事件や事故に巻き込まれないための意識啓発のほか、健康管理なども含め幅広く危機管理意識を醸成することを目的として開催しており、危機意識の重要性や安全対策に関する講演が行われた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/000965.html>



7月14日

GU-GLOCAL シンポジウム「日本の魅力を発信！ストーリーの力×グローバル視点＝？」

7月14日、大学生・高校生の積極的な国際化プログラムへの参加を促すことを目的として、シンポジウム「日本の魅力を発信！ストーリーの力×グローバル視点＝？」を開催した。初めに、映画ドラマプロデューサーの山田兼司氏が『映画における「世界」とは』と題して講演した。続いて、山田氏に加え、脳科学者で

作家の茂木健一郎客員教授、リム・リーワ副学長（国際展開・多様性・ジェンダー（男女共同参画）（副）・図書館（副）担当）が登壇し、『ストーリーの力×グローバル視点が生み出すモノとは？』をテーマに語り合った。学内外から312名が参加し、壇者達の熱い思いに多くの参加者が耳を傾けた。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000971.html>





8月23日 特別講演会『はじめてのリトアニア語』

8月23日、岐阜・リトアニア交流事業「リトアニア NOW2025」の一環として、帯広畜産大学の木村文准教授をお迎えし、特別講演会『はじめてのリトアニア語』を開催した。学生・教職員・一般の方あわせて24名が参加した。

講演では、リトアニア語の日常会話に欠かせない挨拶や月・曜日の表現のほか、主要都市（ヴィリニウス、カウナス、クライペダ、シャウレイ）について紹介された。他にも、ソ連からの独立を求める平和的市民運動「バルトの道（人間の鎖）」や文学作品の解説に加え、リトアニア語での詩の朗読も披露された。質疑応答ではリトアニア語に関する活発なやり取りが交わされ、終了後には木村先生の著書を話題に懇談が行われ、参加者がリトアニアの言語と文化への理解を深める貴重な機会となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/000977.html>



10月31日 本学留学生の常滑旅行

10月31日、本学留学生13名が常滑市へ半日旅行に出かけた。一行は、最初に INAX ライブミュージアムへ訪れ、美しいタイルや陶器の歴史に触れながら、ものづくりの魅力を体感できる充実した時間を過ごした。

続いてやきもの散歩道を散策し、歴史ある窯元の街並みを歩き、ガイドさんからの案内もあり、より深い学びのある旅となった。参加した留学生からは、「町がとても美しかった」、「新しい留学生の友達を作ることができた」、「また常滑旅行したいと思える体験だった」など、好評の声が寄せられ、早くも次回の旅行開催を期待する声も聞かれている。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/information/001027.html>



11月8日 モネの池テラスイベント

11月8日、グローバル推進機構及び地域協学センターが担当する岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム・グローバルリーダーコースにおいて、学生らが「関・グローバルプロジェクトチーム」となり、関市板取の「名もなき池（通称：モネの池）」周辺で地域協働イベント『モネの池テラス』を開催した。学生らはイベント運営について調整を重ねた。また、来訪者がくつろげる環境づくりとして、株式会社タイムックの技術的な支援のもと、高校生と共同でベンチを製作した。完成したベンチは、イベント当日に関市に寄贈し、フラワーパーク板取敷地内に設置された。イベントでは、岐阜大学生と関商工高校生が協働で考案した商品を販売し、観光客や地域住民に非常に好評を得た。本イベントは、地域の思いや現場の課題に触れながら、その解決に向けて主体的に取り組む実践的な学びの場となった。本講義では、今回得られた経験を次年度以降の活動へとつなげ、地域課題の発見と解決に寄与できる人材育成を一層推進していく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/001031.html>



3月7日～11日 インド工科大学グワハティ校でのシンポジウムで北東インドとの新たな協働の枠組みに参画



3月7日～3月11日、インド北東部アッサム州のインド工科大学グワハティ校（IITG）を訪問し、3月9日に同校で開催された「グワハティJDPシンポジウム」に登壇した。シンポジウム冒頭では、吉田和弘学長が日印の学術協働の重要性を述べ、リム・リーワ副学長が岐阜大学の国際展開、ジョイント・ディグリープログラム（JDP）、インドとの教育研究協働の広がりについて紹介した。シンポジウム内で開催されたラウンドテーブルでは、岐阜大学、IITG 及び北東インドに所在する、計21大学が参加する「北東インド・日本大学連携コンソーシアム」（NER-Japan international academic and research consortium）の設立に向けた意向表明書（Letter of Intent: LoI）署名式が組み込まれた。午後の学術セッション内「Health-care for a better tomorrow」では、吉田和弘学長が自身の研究成果と岐阜大学が取り組む医療・生命科学分野における国際共同研究の展望を講演し、日印双方から高い関心が寄せられた。同日夜には、アッサム州政府主催のバンケットが行われ、日本学術振興会（JSPS）、科学技術振興機構（JST）、国際協力機構（JICA）、日本貿易振興機構（JETRO）および日本企業関係者らと共に、岐阜大学から吉田和弘学長、リム・リーワ副学長、小山博之グローバル推進機構長が出席した。ここでは、日本企業による北東インド進出、研究・教育連携、学生交流に関する意見交換が行われ、岐阜大学が日本とインド北東部をつなぐハブとして果たす役割の重要性が改めて認識された。岐阜大学は今回の LoI 署名とシンポジウムを新たな起点として、北東インド地域を中心とする日印の学術・研究・産業連携をより強固にし、「地域から世界へ」を掲げる本学の国際展開を今後も力強く推進していく。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/planning/information/001068.html>



留学生就職促進プログラム関連

11月22日 第24回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会

11月22日、第24回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会が中部学院大学各務原キャンパスにて開催された。平成13年度より岐阜県内の教育機関に在学する外国人留学生の日本語学習意欲の喚起及び日本語の表現能力の向上を図ることを目的に行っている。留学生9名の本選出場者が約7分間の日本語のスピーチを行い、日頃の努力の成果を存分に発揮した。本学からは、交換留学生2名が参加し、日本語の表現能力の向上及び日本文化の認識につながる有意義な大会となった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/isepp/information/001020.html>



11月26日 岐阜地区ワークショップ

11月26日、岐阜大学全学共通教育講義棟において、第8回目となる2025年度愛岐留学生就職支援コンソーシアム岐阜地区ワークショップを開催した。2部構成で行われ、第一部では留学生と企業の双方向交流（グループトーク）を実施し、テーマとして「留学生と企業の“リアル”を知る」を掲げ、具体的な質問を通じて率直な声を共有した。第二部では、留学生が参加企業各社のブースを訪ねて面談を行った。本年度は企業から8社13名、留学生22名の参加があった。

参照：<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/isepp/information/001026.html>





日本語・日本文化教育センター関連

5月14日 郡上踊りワークショップ

毎年恒例の郡上踊りワークショップを、日本語・日本文化教育センター（日文センター）の和室において開催した。当日は約30人の留学生が参加した。ワークショップが始まる前に、希望者には美濃市の着付けグループの方々が浴衣の着付けを行い、色とりどりの浴衣を身に着けた参加者は写真撮影を楽しんでいた。郡上市から2名の講師を招き、郡上踊りの代表的な2曲「かわさき」と「春駒」の踊りを習った。手の動きや足の動き等を丁寧に指導していただき、参加者も真剣に踊りに取り組み、日本の伝統文化を体験していた。留学生にとって、日本や岐阜の文化を感じる貴重な機会となり、さらに地域文化や伝統行事に興味を持つきっかけとなったようだ。

参照：<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2025/05/entry19-14382.html>



7月9日 能楽（能・狂言）ワークショップ

日文センターでは、学生たちが能楽を通じて日本の伝統文化への理解と関心を深め、国際交流と異文化理解を促進することを目的として、2005年度からプロの能楽師による能楽（能・狂言）ワークショップを行っている。6月から本学に留学しているサマースクール参加学生を含む約50名の参加者が集い、日本の伝統文化を堪能した。講師として観世流シテ方の味方團氏及び田茂井廣道氏（以上能の講師）、大蔵流狂言方の茂山忠三郎氏及び山口耕道氏（以上狂言の講師）の4名を日文センター和室にお迎えした。能楽・狂言の実演や、歴史や音楽の講義、能装束の着付けといった盛りだくさんの内容で、本物の日本の文化を間近で体験できる貴重なイベントとなった。

参照：<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2025/07/entry15-14491.html>



12月10日 十二単の着装と体験－日本の民族衣装－ （日本文化ワークショップ）

日文センター和室にて、日本文化ワークショップ「十二単の着装と体験－日本の民族衣装－」を開催した。当日は、インド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学から受け入れているウィンタースクール参加学生をはじめ、本学に在籍する留学生や日本人学生及び教職員など、約50名が参加した。本ワークショップでは、和服の着付けを専門に指導されている伊藤慶子（豊装慶）氏他4名の講師陣によって指導が行われた。箏の生演奏も披露され、荘厳で優美な雰囲気の中、参加者たちに十二単の魅力が伝えられた。日文センターの土谷教授から日本語・英語の両言語で日本の歴史や十二単の基礎知識の説明があった後、着付けモデルとなる代表者に着付けが施された。作法に従い、鮮やかな衣をまとっていきの様子に、参加者たちは興味深く見入っていた。日本の伝統文化の奥深さ、美しさを堪能することができた有意義な時間となった。

参照：<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2025/12/entry18-14772.html>



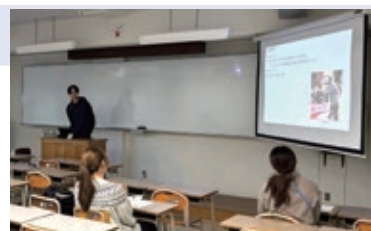
上記の詳細や、その他のイベントについては『岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要2025』を参照ください。

学内の国際化の取組

* 海外留学フェア2025春（4月16日）、 海外留学フェア2025秋（11月19日）

「海外留学フェア春」は、交換留学や短期間の海外派遣プログラムに関する情報を提供し、留学の促進を図ることを目的として開催している。本イベントには、過去に留学を経験した学生が登壇し、自己の貴重な経験を振り返りながら、各プログラムの魅力について紹介した。今年度は新入生をはじめとし、学生・教職員合わせて44名が参加した。

また、秋についても「海外留学フェア秋」として、春と同様のイベントを開催し、学生・教職員合わせて15名が参加した。



海外留学フェア2025春プログラム	
開会挨拶	グローバル推進機構 小山博之機構長
留学に関する説明	留学支援室
留学に必要な英語力	
TOEFL	ETS Japan 合同会社 星川朗氏
IELTS	(公財) 日本英語検定協会 宮崎亮輔氏（オンライン）
岐阜大学の留学プログラム	
オーストラリア・グリフィス大学 ESL プログラム	工学部3年 掛川裕生さん
カナダ・アルバータ大学 ESL プログラム	応用生物科学部2年 辻井ひなたさん
カナダ・アルバータ大学 EST プログラム	応用生物科学部4年 池田奈央さん
カナダ・アルバータ大学 EFN プログラム	医学部看護学科2年 服部雪乃さん、医学部看護学科2年 福田彩乃さん
アメリカ・カリフォルニア大学デービス校 EST プログラム	自然科学技術研究科2年 志賀勇太さん
スプリングスクールプログラム	地域科学部4年 唐木菜々美さん
フェ大学学生交流プログラム	社会システム経営学環3年 生田悠姫さん
交換留学	
アメリカ・ノーザンケンタッキー大学	地域科学部4年 廣瀬佳歩さん
教育学部主催短期派遣プログラム	
アメリカ・ノーザンケンタッキー大学	教育学部 巽徹教授

海外留学フェア2025秋プログラム	
開会挨拶	グローバル推進機構 巽徹留学推進副部門長
留学に関する説明	留学支援室
岐阜大学の留学プログラム	
オーストラリア・グリフィス大学 ESL プログラム	自然科学技術研究科2年 寺澤寛哉さん
カナダ・アルバータ大学 ESL プログラム	応用生物科学部3年 石川翔也さん
アメリカ・カリフォルニア大学サンディエゴ校 ESL プログラム	工学部2年 藪井菜帆さん
アメリカ・カリフォルニア大学デービス校 EST プログラム	自然科学技術研究科2年 原田健登さん
交換留学	
アメリカ・ノーザンケンタッキー大学	工学部4年 張宇箏さん
応用生物科学部 短期派遣プログラム	
タイ・シーナカリンウィロート大学	自然科学技術研究科2年 濱木美侑さん
トビタテ！留学 JAPAN	
中国・上海交通大学ほか	連合農学研究科2年 中込光穂さん（オンライン）

* 若手研究者支援（海外研修プログラム）

本学グローバル推進機構では、協働教育担当者の充実を図るために、「岐阜大学若手・中堅研究者海外研修プログラム」を実施し、海外研修を行う者への支援を行っている。これは、様々な制約から海外での研究経験を積む機会が乏しかった若手・中堅の教員を対象としたものである。令和2年度より新型コロナウイルス感染症の影響により海外渡航が困難となっている状況に鑑み、特例措置として海外研究機関との共同研究を促進するための支援として実施していたが、令和4年度より、海外研修を行う者へ海外渡航への支援を再開した。

令和7年度採択者

所属部局	氏名（職名）※	共同研究機関（国名）	助成額	報告書
応用生物科学部	鈴木史朗 （准教授）	ケンブリッジ大学・生化学科 （イギリス）	200,000円	
応用生物科学部	村上麻美 （准教授）	コロラド州立大学 環境・放射線保健科学科 （アメリカ）	100,000円	
応用生物科学部	中川香澄 （助教）	ミシガン州立大学 （アメリカ）	600,000円	

※職名は採択時のもの。

大学の世界展開力強化事業

大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業」とは：

文部科学省が公募する本事業は、国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力を強化するため、日本人学生の海外留学と外国人学生の受入れを行う国際教育連携の取組を5年間継続支援するものである。

本事業において、岐阜大学はインド工科大学グワハティ校（IITG）と共同で実施する以下の取り組みについて申請し（令和4年度及び7年度）いずれも採択された。

○ 令和4年度採択（インド太平洋地域等との大学間交流形成支援）：

「グローバル JDP プラットフォーム形成による北東インド・東海圏における実践力のある高度人材育成」

*プログラムのポイント

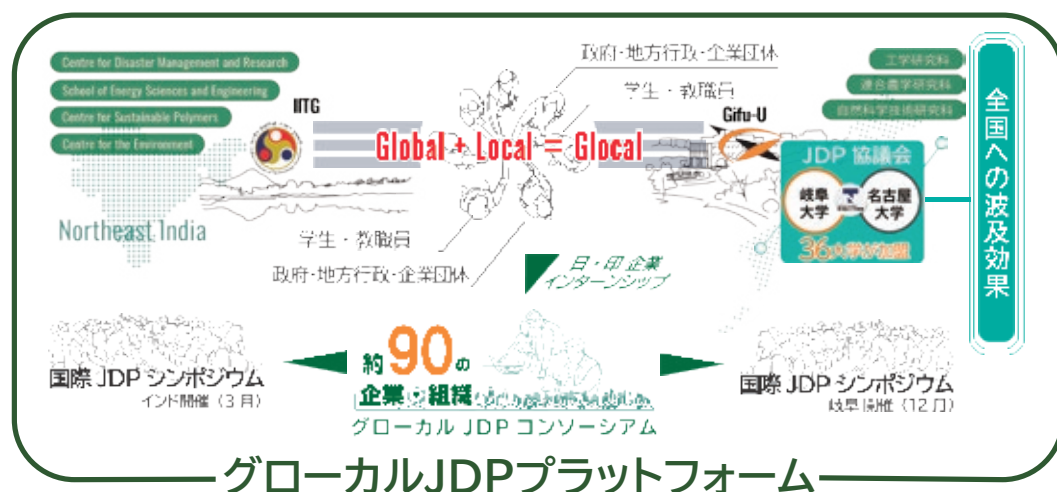
3専攻の国際連携専攻（以下、「JDP」という。）を設置・運営する岐阜大学とインド工科大学グワハティ校を中心に、岐阜を中心とする東海地域や北東インド地域の産官学（JDP コンソーシアム）が協働して国際連携教育に貢献するグローバル JDP プラットフォームを形成する。それを活用することにより「食品・サプライチェーンエキスパート」、「減災・防災エキスパート」、「サステナブルエネルギーエキスパート」等の修了証発行型教育プログラムを構築し、グローバル高度人材を育成する。

*主な取組

- ・地球規模課題の理解や国際的な共創体験ができる学部学生向けの短期留学や長期継続型オンライン交流プログラム及び産学連携・国際共同研究等のリーダー育成に向けた大学院学生向けの修了証発行型プログラムを構築し、段階的・体系的なプログラムを提供
- ・国際展開する JDP コンソーシアム加盟企業におけるインターンシップの実施とアントレプレナー教育により、国際的に活躍できるグローバル高度人材を育成・国際シンポジウムの実施により、JDP コンソーシアム加盟企業・組織の相互交流機会を創出し、両地域の課題を世界的な視点で解決するアイデアの共創・大学の国際化促進フォーラムや全国大学 JDP 協議会を活用し、グローバル JDP プラットフォームを全国の大学へ展開

グローバルJDPプラットフォーム

日印で定期開催するシンポジウムを通じて、産官学金、連携大学が参加する場、「グローバルJDPプラットフォーム」を形成する。



[令和4年度大学の世界展開力強化事業 Web サイト]

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/jdp-platform/>



○ 令和7年度採択（グローバル・サウスの国々との大学間交流形成支援）：

「インテリジェント・マニュファクチャリングにおける日印マイクロクレデンシャルを中心とした学生・社会人に対するシームレスな技術者養成プログラム」

*プログラムのポイント

マイクロクレデンシャルを伴う IITG との技術者育成プログラム等の実施を通じて、Society 5.0の実現と多文化共生社会の推進を担う「変革推進人材」を育成し、英語力・専門性に加え、日印協働や地域企業との共創を通じて国際的視野と地域定着力を併せ持つ次世代人材を輩出する。

*主な取組（予定を含む）

・【Intelligent Manufacturing Program (IMP)】

修士レベルの工学系の大学院生を対象に AI・ロボティクス・スマート製造技術の基礎から応用まで学ぶ情報機械工学分野のマイクロクレデンシャルを IITG と共同創設する。将来的には JDP に繋がるような科目設計を行い、マイクロクレデンシャルから JDP 設置のモデルとすることを目指す。IMP は、履修証明プログラムとして社会人にも提供し、社会人のアップスキリングに貢献する。

・【AI 4 GLOCAL Ideathon Program】

学部レベルの全学の学生を対象に、渡航期間2週間以上の短期国際化研修プログラムを開発する。AIの基礎理解から社会課題の探究、相手大学学生との共修（混成チームによる多文化協働）を伴うアイデア創出（アイデアソン）までを相手大学に渡航して実施する。また、東海地域の大学や経済団体、企業の協力を得て体系化する。

・【Gifu-India Student Community (GI-SC) の設立】

本学および IITG に学生主体のサークル組織を設立し、日印の学生間でオンライン交流を行う。さらに、本学や IITG 卒業生を含め地域企業で働く岐阜在住のインド人が集まる「Gifu Indian Scientists & Engineers Community (GI-SEC)」を組織し、社会人と学生が年齢や立場を超えた交流を行う場や留学生に対するキャリアモデルを示す場を構築する。



[令和7年度大学の世界展開力強化事業 Web サイト]

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/globalsouth/>



地域国際化の取組

* Glocal Lesson

Glocal Lesson は、2021年夏に公開を開始し、「地球規模で考えながら地域の課題を解決する」グローバル人材の育成を目指す岐阜大学グローバル推進機構が配信・対面・リアルタイムで提供する学習プラットフォームである。

登録情報（2026年3月31日時点）

公開動画数：241本（有料112本 / 無料129本）

掲載講師数：110名

収録動画の総時間数：約93時間

会員数：1,358名

（内訳） 有料会員（月額2,500円） 1名

無料会員1,097名

特別会員（東海国立大学機構アドレス）260名



[Glocal Lesson Web サイト]

<https://www.gu-glocal.com/>



全国大学 JDP 協議会

全国大学 JDP 協議会とは：

本協議会は令和4年4月に設置され、ジョイント・ディグリープログラム（JDP）を開設、あるいは開設を予定している大学が、JDP の運用における課題の改善や情報共有、JDP の活用の方策並びに今後の展望についての検討、JDP に関する意見・要望等のとりまとめ及び文部科学省への提言、新規 JDP 立ち上げ校に対するアドバイスを目的として組織している。

* 主な取組

10月2日、岐阜大学が会長大学を務める全国大学 JDP 協議会において、第4回総会をオンラインにて開催し、14大学1機関111名の出席があった。

総会では、文部科学省高等教育局 佐藤邦明参事官（国際担当）による講演「ジョイント・ディグリープログラム及び大学間交流の推進について」が行われた。

続いて協議事項へ進み、JDP 運用にあたっての問題点及び文部科学省への要望事項について協議された。

その後、JDP 実施状況調査結果、令和7年度 JDP 設置意向調査結果、JDP 関連のイベントの開催について報告があった。

本協議会は、今後も定期的に総会を開催し、JDP の成果やノウハウを共有しながら、より効果の高い JDP を全国に展開することを目指し、有意義な連携を図っていくこととしている。

[JDP 協議会 Web サイト]

<https://jdp-council.jp/>



留学生のための就職支援プログラム

愛岐留学生就職支援コンソーシアムとは：

文部科学省「留学生就職促進プログラム」の事業目的に賛同した愛知及び岐阜県下の大学、地方公共団体、経済団体及び企業団体が連携し、留学生の日本での就職支援を行うために設立されました。留学生就職促進プログラムは2021年度で終了しましたが、コンソーシアムの枠組みを活用し、引き続き就職支援の各種プログラムを実施します（図1 参画機関と全体像）。

* 参画大学：

名古屋大学・岐阜大学・名古屋工業大学・名城大学・南山大学・愛知県立大学・中京大学

* コンソーシアムの目的：

留学生の就職支援のための教育プログラムの開催

* 開催内容：

「ビジネス日本語教育」「キャリア教育」「インターンシップ」

参画機関と全体像

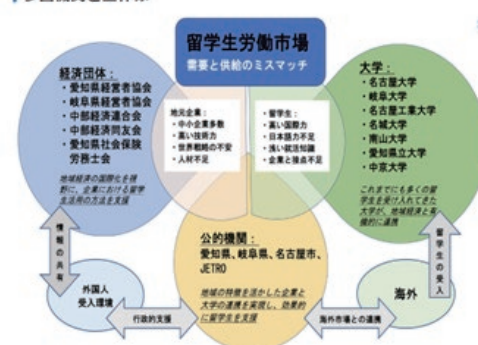


図 1

* 本学の取組

本学では、国内で就職を目指す留学生に次のプログラムを提供した。プログラムの一部は、本学が参画する愛岐就職支援コンソーシアムの構成大学の留学生へも提供した。

プログラム名	開催時期	取組内容
キャリア日本語	5月～7月 11月～2026年2月	キャリアプランニング、企業分析、エントリーシート、履歴書の書き方、グループディスカッション、面接練習など
就活ガイダンス 「夏インターンシップに向けた準備」	5月14日	日本で就職を目指す留学生へのキャリアガイダンス
就職活動支援講座	6月18日、 6月25日、 7月2日、 10月22日、 11月12日、 11月19日	「業界・企業分析」「応募書類作成」「面接対策」等の講座を実施
学生企業展 業界研究セミナー	12月13日～ 12月14日	約200社が出展し、「視野を広げたい」「企業の雰囲気を知りたい」「新たな出会いの場が欲しい」というニーズに応えた。
岐阜地区ワークショップ 共催：岐阜県、岐阜県経営者協会、 ジェトロ岐阜	11月26日	第1部：グループトーク：留学生と企業の“リアル”を知る 第2部：企業と留学生との個別交流

開催件数：5件

岐阜地域留学生交流推進協議会

岐阜地域留学生交流推進協議会とは：

留学生交流推進会議は各都道府県46地域（2013年）に設置されている。岐阜県では平成2年2月に「岐阜地域留学生交流推進協議会」（以下、「岐留協」という。）が置かれた。

岐留協は、岐阜県内における留学生の円滑な受入れの促進と交流活動の推進を目的とし、会員は、岐阜県内に所在する大学、地方公共団体、経済団体、国際交流関係団体等43機関からなる。会長は岐阜大学長が務め、本学が事務局を運営している。

＊岐阜地域留学生交流推進協議会総会を開催（7月3日）

7月3日にオンラインにて岐阜大学が事務局を務める岐留協の総会を開催し、27機関が出席した。

総会では、リム・リーワ副学長による開会挨拶の後、文部科学省 高等教育局 参事官（国際担当）付 宮川卓也参事官補佐・留学生交流室室長補佐による講演「留学生政策をめぐる現状と取組」と題した講演が行われた。

その後、岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会に係る運営方法、令和6年度事業報告及び決算、令和7年度事業計画及び予算について審議し、承認された。

＊第24回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会を開催（11月22日）

11月22日、中部学院大学において、本学が事務局を務める「岐留協」の取組みのひとつとして、「第24回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会」が開催された（幹事校：中部学院大学）。

本大会は、平成13年度より岐阜県内の教育機関に在学する外国人留学生の日本語学習意欲の喚起及び日本語の表現能力の向上を図ることを目的に行っており、岐阜協立大学、中部学院大学短期大学部、中日本自動車短期大学、国際たくみアカデミー、及び本学の留学生9名（6ヶ国）の本選出場者が約7分間の日本語のスピーチを行い、日頃の努力の成果を存分に発揮した。

なお、本弁論大会の実施にあっては、岐阜県経済同友会、岐阜県商工会議所連合会及び岐阜県経営者協会から御支援を得て開催した。

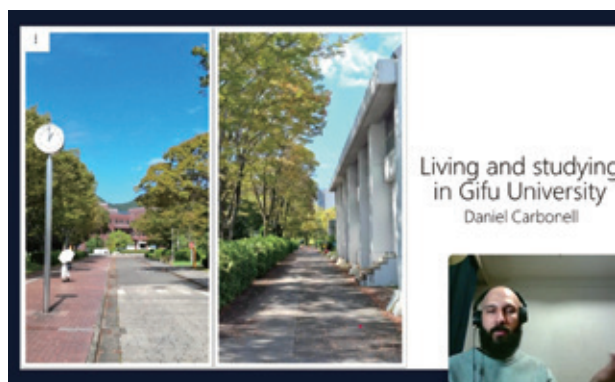
Ⅱ. 各学部・研究科等の主な国際交流活動

1. 教育学部

カールスルーエ教育大学日本語クラス WEB 交流会（12月5日・12日）

教育学部の部局間学術交流協定校であるカールスルーエ教育大学（PHK・ドイツ）と毎年恒例となっている PHK 日本語クラスとの WEB 交流会を、12月5日と12日の2日間にわたり開催した。PHK の学生7名、本学学生6名に加え、PHK へ留学中の本研究科学生1名、本学に留学中の国費教員研修留学生1名、両大学の教員4名が参加し、19名による交流となった。

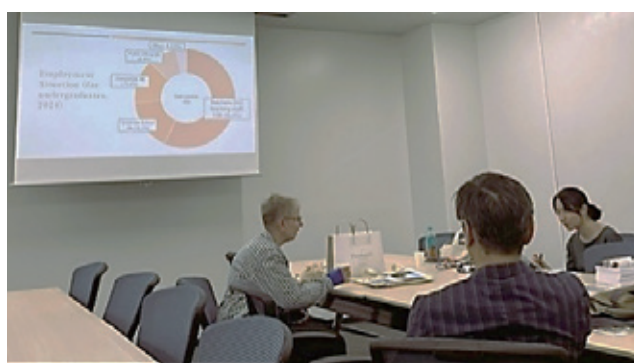
交流会では、留学生による岐阜大学での留学体験の紹介をはじめ、日独両国の学校行事や教職に関する話題、文化紹介、クイズ形式の自己紹介など、多様なテーマが展開された。日本語・英語・ドイツ語を交えたプレゼンテーションやグループ交流を通して、終始リラックスした雰囲気の中、活発で実りある意見交換が行われた。交流終了後には、PHK より心のこもった贈り物が届き、本学学生からも返礼を行うなど、相互理解と信頼を深める温かな国際交流の機会となった。



カールスルーエ教育大学研究者来訪を通じた連携深化

カールスルーエ教育大学（PHK）との協定締結から10年が経過し、この間、交換留学は8名、WEB 交流会を計6回実施してきた。さらに、研究者交流については、数学教育講座および理科教育講座を中心に継続的な連携が図られており、次年度以降は文系講座や芸術系講座への展開も予定している。

こうした今後の連携深化を見据え、6月9日にはメヒティルト・キーゲルマン教授（博士）が来訪、また、2026年2月27日には同大学日本語講師である井上グラムリッヒ夫妻が来訪し、本学の視察を行った。視察では、留学生受入体制や教育学部における教職課程カリキュラムの紹介に加え、授業見学を通して学生による活発なディスカッションの様子が披露され、来訪者からは本学の教育実践に対して高い関心が寄せられた。



2. 地域科学部

留学説明会および帰国者との交流会（6月25日）

6月25日に「留学説明会および帰国者との交流会」を開催し、留学を終えて帰国した4年生2名、3年生1名とこれから留学する予定の2年生4名、留学を希望する1年生4名が参加し、留学先での学習や生活、状況などについて交流を行った。留学経験者としてはノーザンケンタッキー大学1名、グリフィス大学1名、ユタ州立大学1名が参加した。

当日は、まず国際交流委員長より交換留学の概要やスケジュール、語学力向上のためのカリキュラムやサポート体制、奨学金等の留学支援制度についての説明、渡航前の学生を対象にした和佐田先生の危機管理に関する講演、その後、留学を経験した国際教養プログラム生が合流し、これから海外留学に出発する学生たちと地域ごとにグループにわかれて意見交換会を行った。海外留学経験者と直接対話することにより、留学への意欲向上につながられただけでなく、海外留学経験者ネットワークの充実にもつながった。



FD 兼留学報告会（11月19日）

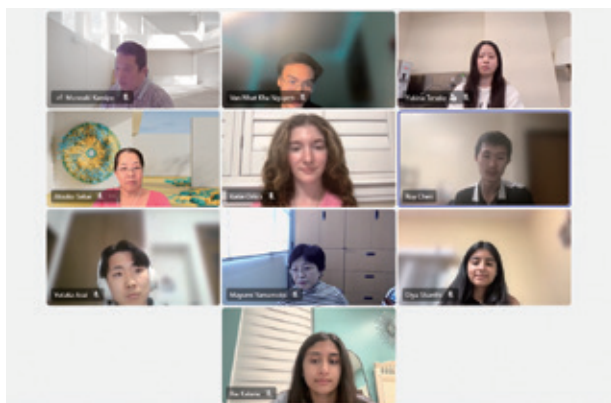
11月19日に交換留学を終えて帰国した国際教養プログラム8期生について、学部内での情報共有と、今後留学を希望するプログラム学生への情報提供を目的としてFD 兼留学報告会を実施した。留学から帰国後の国際教養プログラム8期生8名（ノーザンケンタッキー大学、ユタ州立大学、グリフィス大学、シドニー工科大学、バイロイト大学）から留学先での勉学や生活の様子について、実体験を交えて報告された。報告会には教員34名、これから留学する国際教養プログラムの地域科学部の学生3名が参加した。留学経験を学生教員間で共有するとともに、今後留学を考える際に有用な情報提供の機会となった。



南フロリダ大学とのオンライン共修授業及び、視察

地域科学部と南フロリダ大学との間で、Collaborative Online International Learning (COIL) 型の共修プログラムである VGE (Virtual Global Exchange) を、2026年2月中旬から3月末にかけて実施した。参加者は岐阜大学地域科学部の学生9名および南フロリダ大学オナーズカレッジの学生20名で、南フロリダ大学オナーズカレッジの酒井教授を相手校担当教員として、日本および岐阜県の街、食、文化等をテーマに、英語を用いたオンライン共修授業を行った。期間中、各学生はオンラインによる対面交流を2回以上実施し、プレゼンテーション発表、ビデオ制作、論文形式の文章作成および相互レビューなどの活動を通じて、国際的協働に取り組んだ。

その一環として、神谷教授が南フロリダ大学を訪問し、大学間学術交換協定の調印式に参加するとともに、オナーズカレッジの酒井教授を訪問・視察し、当該 VGE 授業に参加した。さらに、学生寮、学生会館、図書館、ジム等の学生生活関連施設を視察し、学生の学修環境および生活支援体制について理解を深めた。



3. 医学部・医学系研究科

サマルカンド国立医科大学表敬訪問、協定書署名（8月25日～26日）

8月25日から26日にかけて、岐阜大学大学院医学系研究科・医学部において、ウズベキスタン共和国サマルカンド国立医科大学との部局間学術交流に関する基本合意書（MOU）署名式を開催し、Rizaev Jasur学長をはじめとする同大学の教職員5名が岐阜大学を訪問した。初日は、牛越博昭研究科長による歓迎挨拶の後、糖鎖生命コア研究所（iGCORE）や航空宇宙生産技術開発センター（IPTeCA）などの研究施設を見学した。その後、医学部本館において吉田和弘学長への表敬訪問および懇談が行われ、両大学の実現・研究の現状や今後の連携の可能性について意見交換が行われた。同日午後にはMOU署名式が執り行われ、協力関係の構築が正式に確認された。署名式後には教員間の意見交換会と医学部附属病院の見学が実施された。翌日は市内文化施設の見学や伝統工芸体験を通じて相互理解を深め、有意義な国際交流の機会となった。



カナダ・マギル大学との交流

これまでMEDCによる臨床実習における学生交流および指導医養成における指導者交流が評価され、カナダのマギル大学と大学間協定を締結し継続している。昨年度は、岐阜県医師育成・確保コンソーシアムが主催するマギル大学との国際プログラムの一環として、カナダ・マギル大学における現地研修が開催され、岐阜県下から9名の臨床指導者が参加し、所定の研修を修了した。本研修では、臨床教育の実践のシャドウイングのほか、医学教育に関する先進的な取り組みを学ぶ機会が提供され、参加者の指導力向上に寄与した。同プログラムについては、MEDCの教員が引き続きディレクターを務め、プログラム全体の企画・運営に関与した。また、令和8年度に予定されているマギル大学からの教員招聘に向けて、招聘計画および教育・研究連携の具体化を目的とした準備ミーティングを関係者間で実施し、今後の国際交流の円滑な推進に向けた検討を行った。

ドイツ・ライプツヒ大学医学部との交流

ドイツ・ライプツヒ大学医学部との交流として、岐阜大学大学院医学系研究科医療者教育学専攻の修士課程において、同大学のDaisy Lotz氏によるWeb講義を実施し、Peer Assisted Learningおよび医学教育における文化的背景の影響について学ぶ機会を提供した。また、2026年3月にはMEDCの西城卓也教授および川上ちひろ准教授が、ライプツヒで開催されたMDN認証の医学教育学講習会を見学した。そこで西城が「Faculty Development in Japan」をテーマに講演を行い密な意見交換の機会を持てた。あわせて教授職を目指す教員に必須とされる体系的なFD制度や、AVIVAモデル等の教育手法に触れることで、本学におけるFDの充実に資する知見を得た。



忠北大学・岐阜大学 医学部生交流会

10年以上にわたり、韓国・忠北大学医学部との相互訪問による国際交流プログラムを継続して実施している。本プログラムは、岐阜大学および忠北大学の両大学の学生が協働し、主体となってプログラムの企画から運営までを担う点に特徴があり、学生の主体性および国際的視野の涵養に寄与してきた。今年度は岐阜大学から訪問する年にあたり、医学部国際交流委員会委員であり MEDC 所属の西城卓也教授、野村理併任講師、ならびに MEDC の川上ちひろ准教授が忠北大学を訪問し、現地教職員および学生との親睦を深めた。滞在中は、両大学の学生とともにプレゼンテーション大会に参加するとともに、附属病院等の見学を行い、日韓両国における医学教育および医療実践に関する理解を深め、今後の継続的な交流に向けた基盤強化を図った。

4. 工学部

工学部短期留学（派遣）プログラム説明会（4月22日）

4月22日、工学部短期留学（派遣）プログラムへの参加希望者を対象とした説明会を開催した。説明会は、対面とオンラインのハイブリッド形式で実施し、より多くの学生が参加しやすい環境を整えた。

当日は、昨年度に本プログラムを通じて留学を経験した学生による体験談を紹介し、留学先での学修や生活の様子を具体的にイメージできるよう工夫した。参加学生の多くは、留学の主な目的として英語力の向上を挙げていたが、体験談を通じて、異なる文化的背景をもつ学生との交流が新たな価値観の発見や、物事を多角的に捉える力の育成につながることが強調された。

2025年度は、インドネシア、大韓民国、ドイツ、リトアニア、マレーシアの協定校へ、合計7名の学生が短期留学に参加した。

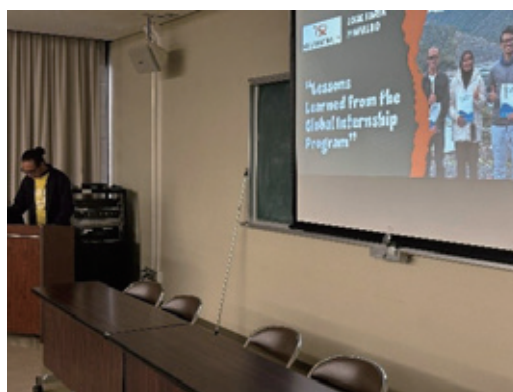
AGP 留学生のグローバルインターンシップの実施

修士課程で学ぶ AGP（Advanced Global Program）の授業科目には、留学生が、日本の企業・団体および研究機関等で学外実習を行うインターンシップを必修科目として位置付けている。

2025年度は、8月～2026年3月に一般企業に1名、岐阜県庁に3名、県内の研究機関に1名を受け入れていただき、専門分野に関連した研修を実施した。特に、工学部グローバル化推進室では、岐阜県庁下水道課と連携し、留学生を対象としたグローバルインターンシッププログラムを提案し、実施した。

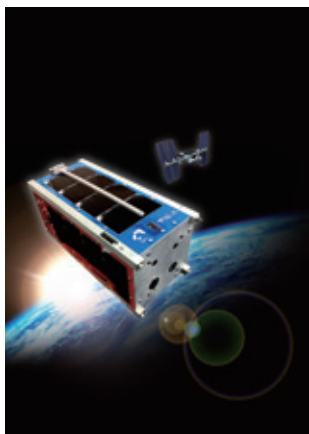
本プログラムでは、留学生の出身国と日本との水環境整備にかかわる法制度の調査・比較のほか、各務原浄化センターにおける水質管理研修、山之上浄水場での業務体験、さらに徳山ダムの歴史や仕組みを学ぶ研修など、水環境行政を幅広く理解するための実践的かつ体系的な内容を実施した。

研修終了後には、各研修先において学生の指導にあたった担当者を招き、留学生が研修内容や成果をまとめて発表するオンライン報告会を開催した。参加した留学生からは現場業務に触れ、通常の講義からは学ぶことのできない水環境のしくみについて深く理解することができたことが報告された。



ぎふハイスクールサット (GHS) プロジェクト

宇宙研究利用推進センターでは、岐阜県内の高校生を対象に実施している高大連携講座の実践プログラムとして、2022年度から超小型衛星プロジェクトである「ぎふハイスクールサット (GHS)」プロジェクトを開始した。本プロジェクトでは、工業高校生が中心になって超小型衛星を製作してきた。GHS 1号機は、2024年12月に岐阜大生・院生による最終作動確認を経て JAXA に引き渡された。公募により「らいちょう」と名付けられたこの衛星は、スペース X 社のドラゴン補給船に搭載され、ファルコン 9 ロケットによって 8 月 24 日に米国フロリダ州ケープカナベラルのケネディ宇宙センターから国際宇宙ステーション (ISS) に向けて打ち上げられた。その後、9 月 19 日に ISS から高度約 400km の軌道上に投入された。「らいちょう」からの電波受信取得には、岐阜大学の管制室や岐阜県内の高校生に加え、リトアニアのカウナス・サンタラ・ギムナジウム (Kaunas Santara Gymnasium, Lithuania) の生徒も参加した。「らいちょう」は 2026 年 1 月には大気圏へ再突入してミッションを完了した。



5. 応用生物科学部

海外留学相談会の開催（4月8日）

応用生物科学部では、海外留学促進のため4月8日に海外留学相談会を開催した。

本相談会は、学部、修士、博士学生を対象に毎年開催しているが、早い段階から留学に対する意欲・関心を醸成するため、開催時期を例年の7月から4月に変更したところ、約100名もの参加があった。各種海外留学奨学金や留学プログラム（ESTやESL、ジョイント・ディグリープログラム（JDP）について紹介するとともに、4名の留学経験者（インド（JDP、スプリングスクールプログラム）、カナダ（EST）、ニュージーランド（研究留学））との懇談会では、参加者から留学前にすべきことや、留学中に大変だったこと等の質問が寄せられ、活発に意見交換を行う姿から、留学に対する関心の高さがうかがえた。

応用生物科学部では、学生にとって海外留学をより身近に感じてもらうために海外留学促進動画も作成しており、今後も学生が様々な留学制度に触れる機会を積極的に設けていく予定である。



「留学相談会の様子」

「タイ農村と都市に学ぶ食と農業技術を通した国際理解研修」（8月25日～28日）

SWUでの研修と農村研修：8月25日～28日の3日間、SWU大学の宿舎に滞在し、現地大学生と交流しながら研修を行った。岐阜大学生とSWU学生は1対1でペアを組み、2日間にわたり多様な交流を深めた。当初、岐大生はタイ人学生に比べ英会話に不慣れでたどたどしかったが、タイ人学生の温かいもてなしと「多少ブローケンでも通じる」という自信から、2日目には活発に交流できるようになった。特に2日目の学外研修では、タイ人学生が岐大生をリードし、最後に別れる際には互いに名残惜しさを感じていた。

また、同大学農場や近隣農村を訪れ、農業国タイにおける農業の実態を視察した。Arom学部長からは、大学シーズによるイネ病害防除技術とその現場への普及状況について説明を受け、さらにドラゴンフルーツ農園やカエル養殖場、日本人が経営する有機農場を視察した。これらの訪問先では、輸出農産物の生産現場として、GAPやHACCP、有機認証といった世界標準の技術や認証制度の仕組みと活用状況を学ぶことができた。

バンコク市内の観光と食文化：タイは観光に力を入れている国であり、バンコクは多くの観光客が世界中から集まる国際都市となっている。岐大生の多くは、タイを途上国のイメージで当初見る者が多かったが、バンコク市内での活動は都市の発展と、特に食文化に関して様々な多様性と魅力にあふれることに気づくことができた。バンコク市内では、逐次連絡を入れることとして、学生は原則的に自由行動として様々なところを見て回った。特に農産物を扱う市場での農作物や食品の豊富さ、その種類の多さを知ることができた。また、伝統的な屋台スタイルの食べ物から、近代的なカフェやケーキ類も多く、歴史と伝統に加え、国際性と先進性が入り混じった日本以上に多様な食文化を実際に感じ、食べ、知ることができた。



「SWU での研修の様子」



「有機農場の視察の様子」

国際獣医学インターンシップ演習（2026年3月2日～6日）

応用生物科学部共同獣医学科では専門科目（選択）として、5年生後期に国際獣医学インターンシップ演習を開講し、ケンブリッジ大学附属動物病院での研修を実施している。本演習では、臨床獣医学に対するグローバルな視点を養うとともに、海外でのコミュニケーション能力を高めることを目的としており、今年度は学生3名が参加した。

ケンブリッジ大学の獣医学生は附属動物病院の各診療科（内科、循環器科、臨床病理科、軟部外科、整形外科、神経科、腫瘍科、馬診断科、麻酔科など）を数週間ずつローテーションし、臨床実習を行っている。本学の学生は5日間にわたり各自が希望する診療科の臨床実習を経験した。本学の学生たちも研修を通じて能動的に学習することの重要性を感じたようで、研修中自発的に疾患について調べ、研修先のレジデントや学生に質問する様子が見受けられた。グローバルな視点を養うという点以外にも、学習に対してより積極的な態度を引き出せたという点で、今回の演習は大変有意義であった。



「インターンシップの様子」

6. 連合農学研究科

「IC-GU12 Roundtable 2025」等を開催（11月10日・11日～13日）

連合農学研究科は、11月10日に、南部アジア農学系博士課程教育連携コンソーシアム加盟校（IC-GU12）による第14回「IC-GU12 Roundtable Meeting 2025」を静岡大学農学部にて開催し、国内外の加盟校教員等31名の出席があった。「農学分野における AI・データサイエンス教育」をテーマに、各大学の事例紹介や AI 教育の現状や課題、農学分野での応用、教育ネットワーク構築に関する議論が行われた。

同時に、同会場にて研究ポスター発表「UGSAS-GU Poster Presentation on Agricultural Sciences 2025」も開催し、本研究科の学生44名がポスター発表した。学生たちは来場者と積極的に意見交換を行い、最新の研究動向を学ぶとともに、自身の研究をさらに発展させるための機会となった。発表後には投票による選考が行われ、本研究科の5名の学生に Best Presentation Award（最優秀発表賞）が授与された。

加えて11月11日～13日の間、静岡市内において「VI Asia Symposium on Quality Management in Postharvest Systems（第6回アジア収穫後システムの品質管理に関するシンポジウム）」を国際園芸学会、日本園芸学会、静岡大学とともに開催した。本研究科の学生9名が口頭発表やポスター発表を行った。本イベントは「Innovative Technology for Sustainable Production and Preservation」をテーマに、収穫後システムにおける品質管理技術や最新の技術紹介、各大学の研究成果等を共有した。また、生物生産科学専攻2年の学生が「ISHS Young Minds Award for the Best Oral Presentation」を受賞した。上記期間中は静岡県内の農業関連施設を訪問する視察ツアーも行われた。



7. 保健管理センター

南フロリダ大学（USF）学生が医学部および保健管理センターへ研究留学

USF 公衆衛生学修士2年生の Luisa Mantano Santoyoさんと Aleeza Masoodさんは、保健管理センターで大学生の健康情報を解析し、それぞれ原著にまとめ査読付き国際雑誌に投稿した。また、USF 医学部4年生の Allison Carcoanaさんは2025年3月23日～2025年4月19日まで循環器内科学講座で湊口助教に指導を、Cathelencia Francisqueさんは2025年3月30日～2025年4月26日まで保健管理センターで深尾教授に指導を受け、臨床研究課題に取り組んだ。同2年生の Dania Ramosさんは心血管外科学講座で加藤准教授に指導を、Carolyn Planskyさんは小児科学講座で川本准教授に指導を受け、いずれも国際学会で研究成果を発表した。

大学間学術協定更新調印式に南フロリダ大学（USF）より Law 学長以下20人の訪問団が来校（4月3日～4日）

本学とUSFは2016年に医学部部局間協定を締結。2020年の大学間学術協定締結に続き、2024年にはUSF医療教育シミュレーションセンター（CAMLs）と提携協定を締結。このような交流実績を更に発展させるために両大学の強い希望により、4月4日、大学間学術協定更新調印式挙行的運びとなった。USFからはLaw学長以下20人訪問団が4月3日に来岐。一団は、各関係分野に分かれ医学部、工学部、地域科学部、糖鎖生命コア研究所、航空宇宙生産技術開発センターの関係者らと懇談、施設見学等大いに交流が深まった。さらに、岐阜市長表敬訪問、郡上市長表敬訪問、岐阜県庁および岐阜城見学と精力的に視察が行われた。3日の交流会では、茶道部による御点前や居合部による演武が披露され、終始和やかな交流が行われた。本学の交際交流活性化と国際化促進に寄与するものと期待する。



在米国マイアミ日本領事館主催 Japan-Tampa Life Sciences & Healthcare Innovation Forum（5月17日）

5月17日、南フロリダ大学（USF）Center for Advanced Medical Learning and Simulation（CAMLs）において、Japan-Tampa Life Sciences & Healthcare Innovation Forum が在米国マイアミ日本領事館主催で開催された。タンパ市長の挨拶に始まり、タンパ市で事業を展開している日本企業やNPOなどがその業務内容や今後の展望を紹介する場であった。本学からは、USFと岐阜大学の協定リエゾンである山本眞由美保健管理センター長が、15分のセッションで、両大学の強固な関係と、医学部や各種研究施設同士の共同研究活動の実績を紹介し、領事館からもお褒めの言葉をいただいた。



南フロリダ大学（USF）公衆衛生学部学生16人が郡上市を訪問（6月24日）

USF 公衆衛生学部生16人と教職員 3 人の総勢19人が6月23日に岐阜に到着。翌24日に郡上市を訪問した。10時に市役所を訪れ山川市長を表敬訪問。その後八幡小学校へ伺い、食育や給食について栄養教員から講義を受けた。実際に給食を見学し、小学生らと一緒に交流（歯磨き、お掃除、校庭遊び）を楽しんだ。地元の郡上八幡国際交流協会とお囃子クラブの協力により、体育館で郡上踊りの体験をした。その後、郡上市内を散策し、皆、豊かな歴史を体験したようであった。



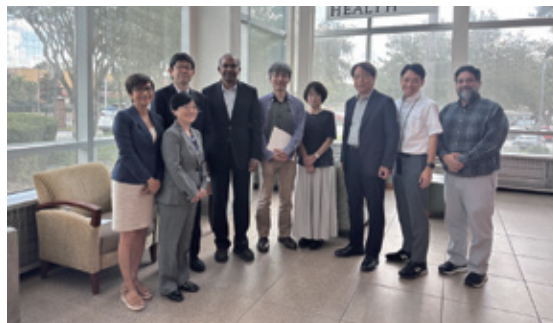
南フロリダ大学（USF）公衆衛生学部学生16人が岐阜大学を訪問（6月25日～26日）

USF 公衆衛生学部学生16人が岐阜大学を訪問。25日は、山本保健管理センター長の講義「日本の医療制度について」、医学部附属病院見学（ドクターヘリと建物の耐震構造）、リム・リーワ国際担当副学長からの挨拶と記念品授与、写真撮影。全学箏曲部による琴の演奏、医学部看護学科3年生とUSF学生のグループ学習スタイルの合同講義に続いて、空手部、居合部の演武披露や浴衣の着付け体験、さらに、医学科学生との鵜飼乗船と盛りだくさんの交流が続いた。26日は、医学部医学科1年生との合同講義で、様々な医療課題抽出とその解決についての議論に取り組んだ。両校学生共に皆、終始楽しそうであった。



南フロリダ大学（USF）を牛越医学部長らが訪問（8月13日～8月15日）

本学の医学部、保健管理センターと USF HEALTH は2016年より部局間協定を締結して緊密な交流を続けてきた。さらなる交流の発展を目指して、8月13日～15日の3日間、牛越医学部長、岩井事務職員、白子医師（高山赤十字病院）、深尾教授、山本教授（保健管理センター）、山本客員教授（連合創薬医療情報研究科）の一行がUSFを訪問した。USFのLockwood筆頭副学長・医学部長と懇談し、Center for Advanced Medical Learning and Simulation（CAMLs）のOkuda所長やアルツハイマー研究所のThinakaran所長とも共同研究や将来のポストク留学の可能性などについて活発な情報交換をすることができた。



保健管理センター開設50周年記念岐阜大学シンポジウム～大学のウェルネス～（9月1日）

保健管理センターが開設50年を迎えたことを記念し、9月1日、岐阜大学記念シンポジウムを開催した。国内、学内からの来賓挨拶、祝辞に加え、南フロリダ大学 USF World のCaruson 副学長からビデオメッセージで祝辞を賜った。また、米国大学保健管理協会（American College Health Association; ACHA）のJames Wilkinson CEOには「米国の大学におけるウェルビーイングの取り組み」と題した特別講演をお願いした。日米ともに大学生のウェルネスとキャンパスのウェルビーイングを真剣に考えているということが共有され、有意義なシンポジウムとなった。



南フロリダ大学（USF）生化学講義と連合創薬医療情報研究科および Make New Standard（MNS）のオンライン共修（Virtual Global Education; VGE）（11月5日～24日）

USF 生化学教室のMeera Nanjundan先生の講義受講学生11人と連合創薬医療情報研究科大学院生および全学 MNS 大学院生12人の参加で VGE を実施した。5つのグループに分かれて、11月5日～24日の間 MS Teams のプラットフォーム上で学習を進める形式で行った。各自の自己紹介をビデオでアップし、課題論文を読み込んでスライドビデオを作成。プレゼンテーションとディスカッションを経てスライドビデオを改

善更新するという学習を英語で行うものであった。本学の学生にとっては、米国の学生とともに英語で発表、討論をするという貴重な機会になり、参加者全員が満足度の高いものとなった。

南フロリダ大学（USF）との大学間協定リエゾン担当の山本眞由美教授が Global Leadership Award 受賞（12月12日）

USF と本学の協定を支援するリエゾンとして活躍してきた山本眞由美教授（保健管理センター長）が長年に渡る貢献を評価され、USF より Global Leadership Award を授与された。12月12日の USF 卒業式で表彰され、特別なスピーチをする名誉を与えられた。

<https://www.usf.edu/news/2025/usf-commencement-spotlights-four-visionary-leaders-advancing-innovation-and-growth.aspx>



南フロリダ大学（USF）と岐阜大学の交換留学協定締結（2026年2月19日）

2026年2月19日、USF において両大学の交換留学協定の調印式が行われた。調印は、USF の Mohapatra 筆頭副学長と本学の保健管理センター長で両大学間協定のリエゾンである山本眞由美教授によって行われ、本学からは、神谷教授（地域科学部）、遠藤准教授、山本客員教授（連合創薬医療情報研究科）、西脇助教、桑山助教、谷口助教（医学部）が同席した。両大学は2016年に部局間協定、2020年に大学間協定を締結しているが、今回、2人／年の授業料非徴収の交換留学協定締結に発展した。学部と大学院の間や違う部局間でも交換留学可能で、期間にこだわらない（例えば6か月×4人／年など）という柔軟性のある有効性の高い協定であることを申し添える。



Ⅲ. 大学の国際化と学生支援

全国大学ジョイント・ディグリープログラム協議会に関する覚え書き

教学事務部門学務部長 野々村晴子

筆者は2026年3月に役職定年を迎えたが、ここまでに国際企画調整役として3年間、学務部長として6年間の都合9年間に渡り、グローバル推進機構を中心とする本学の国際関連事業に関わる立場にあった。この間様々なことがあったが、特に本学のジョイント・ディグリープログラム（JDP）4専攻の立ち上げから、全国大学ジョイント・ディグリープログラム協議会（JDP協議会）の設立という本学の国際関連事業を特徴付ける重要な出来事を経験した。本稿ではそのうちJDP協議会に関する経緯を記すものである。

1. JDP協議会とは

JDP協議会は、2022年4月に設立され、現在の会員はJDP設置校である14大学（岐阜大学、名古屋大学、筑波大学、立命館大学、長崎大学、広島大学、京都工芸繊維大学、名古屋工業大学、山口大学、東京科学大学、京都大学、東京都市大学、九州大学、滋賀医科大学）であり、それ以外にオブザーバー大学として23大学が参加している。

JDP協議会の目的は、「全国の大学におけるジョイント・ディグリープログラムに係る運用に関する課題の改善、活用の方策の検討、今後の展望についての検討、情報の共有、文部科学省に対する意見・要望等のとりまとめ・提言及びジョイント・ディグリープログラムの設置を検討・予定している大学への助言等の支援を図る」（JDP協議会 HP）ことである。主な活動としては、会員、オブザーバーが参加する総会を毎年1回開催し、各大学から出された課題に基づく要望の取りまとめと、各大学のJDPに関する取り組みの紹介等が行われている。そして、取りまとめた要望については文部科学省への要望書を作成し、これまで毎年提出している。

2. JDP協議会設立の背景

岐阜大学はJDP協議会設立以来、現在まで継続して会長大学を務めている。これは、JDP協議会の設立を提案し、他大学に声掛けをして組織化し、文部科学省にも認められる存在として位置付けられるまでの活動を自らが主体となって行ってきた実績に基づくものである。

ではなぜ、本学はこのような活動をするに至ったのか。それは、本学がJDPを本学の国際化の柱と位置



付け、2019年4月にJDP4専攻を同時に立ち上げたことに起因する。JDPの設置には、文科省に国際連携専攻の設置申請を行う必要があり、通常は主として研究科や専攻が主体となって取り組む。しかし、本学ではグローバル推進機構（2018年度までグローバル推進本部）が関わって、4専攻の担当教員が連携し情報共有しながら、グローバルの関係教職員がそれを支援して設置準備をするという大学としての組織的な活動となっていた。そしてこの間、設置申請を始めとするJDPの規制の多さから多大な時間と労力をかけることとなり、JDP設置における課題も本学として強く認識したところであった。当時の国際担当理事でグローバル推進機構長の鈴木文昭先生は、自身の経験から、これを解決するには全国協議会のようなものを作って文科省へ意見を出していくと良いのではないかと意見を述べておられた。事務方としても同様に感じており、本学がそのような動きを主体となれば、他大学には無い特徴となっていくのではないかと考えていた。

しかし、現実的には、地方国立大学である岐阜大学がそのような声をあげても他大学に賛同してもらえる見込みはあまり無く、夢物語として時折話題にするだけであった。ただ、当時、文科省へJDPシンポジウムの相談に行った際、鈴木理事が雑談に紛れて協議会の話をしたところ、なかなか良い感触ではあった。

2019年度末で鈴木理事の任期が終了し、この話は終わったように思っていたが、2020年度になると、JDP4専攻を設置している本学に、これからJDPを設立しようとする大学から相談が来るようになり、課題解決のための協議会設置の必要性和本学の役割について改めて考えさせられる状況となっていた。また、この年に名古屋大学との法人統合により東海国立大学機構が発足したが、名大はその時点でJDPが6専攻あり、本学と名大を合わせると全国のJDPの半数近くを占めるという、東海機構の特徴の一つとなったのである。このため、鈴木理事の後任の植松美彦グローバル推進機構長を中心に協議会の設置について検討を行い、名大と話し合いを行うこととなった。名大としては、JDPは国際関連の多様な取り組みの一つであり、それだけを取り上げる事は考えていないとのことだったが、岐大主体で行い名大はそれに協力するという役割分担であればということと合意し、協議会設立を進めることとなった。

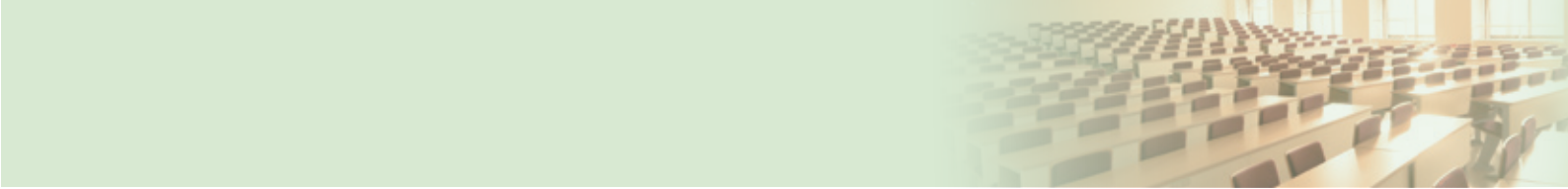
その次の動きとして、本学が行う岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウムのうち、東海機構主催のメインシンポジウムで協議会設立を提案することとし、事前にJDP設置大学への説明を行っていった。また、同シンポジウムに参加予定の文科省S氏にもあらかじめ状況説明を行った（S氏は前年に鈴木理事が協議会のアイデアを伝えた相手でもある）。そして同年12月8日のシンポジウムにおけるパネルディスカッションにおいて、植松機構長による協議会設立の提案が行われたが、S氏から「文科省としても全力で支援する」との発言をいただき、設立を強く後押しされる状態となった。

翌2021年度、ちょうど文科省がスーパーグローバル大学創成支援事業及び大学の世界展開力強化事業採択大学によるフォーラムを形成し、プロジェクトを募集しようとしていた。本学はその時点では採択大学ではなかったが、名大の名前で「我が国の大学教育国際化に資するジョイント・ディグリープログラム～全国大学ジョイント・ディグリー協議会による推進～」として応募し、選定された。これを受けてその年の11月に協議会準備会合を実施し、2022年4月1日、正式にJDP協議会の設立に至ったのである。

3. JDP 協議会の成果（大学設置基準等の改正）

JDP協議会では、これまで毎年要望書を文科省へ提出している。参加大学からの要望は大きく3点に分けてまとめられている。1. 経済的・財政的支援、2. 制度上の課題、3. 社会的認知度の向上である。すぐに改善を求めるというよりも、参加大学の実情を丁寧に汲み上げ文科省へ実情を伝えることを重視して作成しており、文科省においても要望内容を真摯に検討していただいている。例えば経済的支援として、2026年度から日本学生支援機構の海外留学支援制度（協定派遣）にJDP重点枠の設置が実現している。

これまで最も大きな成果は、2022年度総会で提案した要望事項に基づき、大学設置基準等（大学設置基準、専門職大学設置基準、大学院設置基準、専門職大学院設置基準、短期大学設置基準、専門職短期大学設置基準をいう）が改正されたことである。このうち大学院設置基準は、大学院を設置するのに必要な最低の基準を国が定めた省令であり、その第十二章に国際連携専攻に関する特例が定められている。2021年度末に、



JDP に関する規制緩和として設置認可要件の緩和（設置申請が必要→学位の種類や分野の変更が伴わない場合は届出可）や収容定員制限の撤廃（JDP は研究科の収容定員の 2 割が上限→上限なし）のため大学院設置基準が改正されたが、その際、「国際連携専攻の教員は教育研究上の支障を生じない場合には当該研究科の他の専攻の教員が兼ねることができる」旨の条文（第40条第2項）が削除された。これは規制緩和により教育の質が担保できなくならないよう、一般専攻と同様の基準を求めることが理由とされた。

この規制緩和自体は歓迎されるものであったが、兼務可能の条文が削除される点については事前にあまり説明されていなかった。しかし、当時、本学で新たな JDP を立ち上げる想定で検討を行ってみると、この条文削除により、JDP の設置が非常に困難になったことに気付いた。なぜなら、これまで JDP の専任教員は他の専攻から兼務することを大前提として設置を計画してきた、いわば制度の根幹であったからである。国際連携専攻単独で設置基準上で必要な専任教員を揃えることは非常に困難であり、これは本学だけではなく、JDP を設置しようとする他大学も同様である。また、既存の JDP についても今後影響する可能性が考えられた。このため、2022年10月開催の JDP 協議会総会の協議事項に、急遽「国際連携専攻に係る専任教員数について」を追加して取り上げることとした。

協議会総会での本学の説明を受けて、アンケートでは、JDP 既設の大学、設置準備中の大学を問わず、改善を望む切実な声が寄せられた。本学では要望書の作成を進めたが、一方、東海機構の松尾清一機構長が国大協の理事会や支部会議で本件を取り上げられたことにより、文科省にも要望の重要性が伝わっていった。要望書の文面は、本学だけではなく名大とも協力して東海機構として精査してまとめ上げ、同年12月に松尾機構長と植松機構長が文科省高等局長に要望書を手交した。

（JDP 協議会 HP「文部科学省高等教育局長へ要望書を手交しました」<https://jdp-council.jp/358/>）

その後の文科省の対応は迅速であり、翌2023年7月31日付けで大学設置基準等が改正され、専任教員の兼務可能が復活することとなった。設置基準の改正は、日本の大学すべてに影響するインパクトを持つ動きであり、JDP 協議会は、早速、役割を果たしたと言える。

日本の JDP は協議会設置時には12大学27プログラムであったが、現在は14大学31プログラムと着実に増加している。JDP 協議会の存在は設置支援に一定の役割を果たしており、当初の構想とそれを実現させ運用を続けている関係者の努力は非常に意義あるものであると考えている。試行錯誤を重ねながら協議会を運営してきたグローバル推進機構及び国際事業課の尽力に改めて敬意を表したい。

国際が実施する産官学連携の歩み

グローバル推進機構・特任教授 三輪真一

1. 産官学連携の目的・歴史

2019年4月に設置されたグローバル推進機構において、グローバル人材の就職支援及びジョイント・ディグリー（JD）活動を基盤にした地域・産業界間の国際連携支援を担うための「地域国際化推進部門」の活動が開始した。具体的には大学の国際的なネットワークを活用し、岐阜県や東海地域の国際化（グローバル化）を支援する取り組みである。これには留学生の地域就職支援や、地域国際化の推進など、地域と世界をつなぐ活動を核としている。地域国際化に際しては産学官金連携の必要性がある。2019年10月7日、8日には、岐阜大学創立70周年の記念行事の一環として、国際シンポジウム（岐阜ジョイント・ディグリー国際シンポジウム2019）を開催し、国内外の大学関係者、研究機関、企業、官公庁からの参加があった。本シンポジウムは翌年以降も毎年開催し、地域国際化の礎として関係機関との連携拡大・発展を重ねている。



2019年国際シンポジウム会場



2019年北東インド商工会の中部経済連合会訪問

今後、教育と研究の分野においては教育プログラムの拡大、研究者交流から社会実装への展開を目指している。

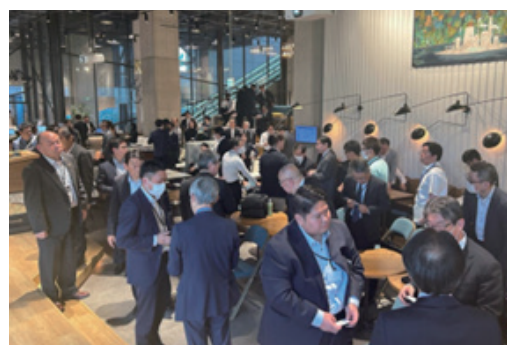


インドとのジョイント・ディグリー（JD）活動の発展経緯（国際事業課作成）

社会実装においては地域連携（産官学金）が不可欠である。2023年12月には、インド工科大学グワハティ校（IITG）及びマレーシア国民大学（UKM）と共に国際協働教育を通じて、各大学が関連する各地域の企業を繋ぐことで、一連のジョイント・ディグリー活動の地域・産業界への波及に取り組む「岐阜大学 JDP コンソーシアム」（以下、「コンソーシアム」とする）を設立した。2025年時点では、51の企業、研究機関、官公庁が参加しており、留学生のインターンシップ・工場見学の実現に加え、参加企業への学生の就職も実現した。社会実装への展開としては、岐阜大学とインド工科大学グワハティ校（IITG）で毎年開催しているシンポジウムにおいて企業間交流を行った。2019年度から開催している岐阜大学でのシンポジウムにおいては、北東インドに豊富に存在するバイオ資源である竹利用に関して議論する産官学金連携セッションを開催し、2022年度から開催している IITG でのシンポジウムにおいては、日本企業 7 社、官公庁 4 機関の参加を得て北東インドの現地企業との交流が実現した。企業との連携では、企業の目指す事業化に対して、年 2 回程度の訪問を通してその最新の事業化計画を理解しつつ、各企業に即した当部門の企画事業への参画を要請することで、その事業化をサポートしてきた。以下に連携の背景と実施内容を紹介する。

2. 中部経済産業局とのコラボによる産業化推進

海外と岐阜県および東海地域を結びつける産業化の推進において、とりわけ北東インドの天然資源である竹利用では、すでに多くの応用製品構想を含めたサプライチェーンと、これに事業参画するポテンシャルのある企業複数社がコンソーシアム内に包含されている。さらに多くの企業参加を目指して、中部経済産業局が主催する「MEET UP CHUBU」の新事業発信プログラムと2024年度より連携し、発信を行っている。2025年6月12日には岐阜大学グローバル推進機構が主体となり、竹資源サプライチェーンの構想紹介及び関連企業 7 社による中部圏の約300社へのピッチ発信が行われた。



名古屋イノベーターズガレージでのピッチと交流会

3. 官公庁訪問企画運営による企業支援

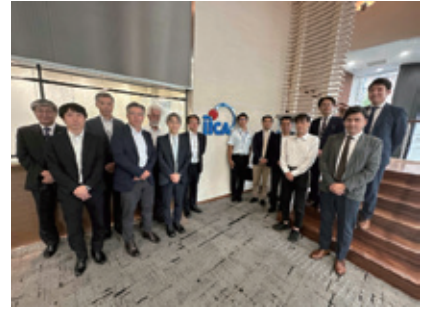
海外との事業化には、政府機関との連携による企業への支援が欠かせない。海外支援、とりわけインドが重要視され、多くの政府事業支援プログラムが準備・施行されている。2022年度より毎年実施する官公庁訪問では、当該政府方針も加味しつつ、関連のコンソーシアム参加企業とともに経済産業省、JETRO、JICA を訪問し、岐阜大学からは包括的サプライチェーン構想の説明と、参加企業からは海外展開事業のプレゼンを実施している。結果として、政府機関支援は企業個別に展開され、各企業のインドの大学採用支援・個別事業化の支援等に繋がっている。また次年度以降の政府支援内容への反映が大いに期待される。



経済産業省訪問時の写真



JETRO 訪問時の写真



JICA 訪問時の写真

4. 留学生の企業訪問イベントと産学連携

JD プログラム学生のインターンシップ、企業訪問の実施に加えて、IITG 及び UKM からの短期受入プログラムであるウィンタースクールでの学生企業訪問を実施した。ウィンタースクールにおいては、学生の専門内容に即した東海地区および東京近郊の企業選定を行い、事前学習として学生への日本企業の紹介とその事業展開・開発技術内容の説明を行った。こうした協力企業の中にはインド及びマレーシア人学生採用の道が開け、年度を通して2名の学生採用実績があった（2025年度）。



ウィンタースクールでの企業訪問（左から NGK 株式会社、デンソー東京支社、日本農薬株式会社）

今後とも、産官学連携活動拡大は岐阜大学国際の活動推進への貢献とその独自性が期待されている。

Ⅳ. 資料

1. 令和7年度 グローカル推進機構名簿

所 属 ・ 職 名 等	氏名	運営委員会	奨学金等選考委員会	部 門				国際企画部門WG	年 報	H P	短期派遣チーム	短期受入チーム	愛岐留学生就職支援コンソーシアムプロジェクトチーム	JDシンポジウムWG	任 期
				国際協働教育推進部門	地域国際化推進部門	留学推進部門	国際企画部門								
副学長（国際・情報・評価（副）担当）	リム リーワ	○												◎	6.4～8.3
グローバル推進機構長	小山 博之	◎	○										○	○	6.4～8.3
グローバル推進機構副機構長 （日本語・日本文化教育センター長）	橋本 慎吾	○	◎										○		6.4～8.3
グローバル推進機構・助教	松井 真弓	○		○	○	○	○	○	○	◎		○			6.4～8.3
グローバル推進機構・特任教授	三輪 真一	○		○	○								○	○	7.4～8.3
グローバル推進機構・特任助教	グレッグリチャードトバ	○		○		○					○	○			7.4～8.3
グローバル推進機構・フェロー	柴田 大輔													○	7.4～8.3
グローバル推進機構・客員教授	青木 哲史				○								○	○	7.4～8.3
グローバル推進機構・客員教授	倉知 寛				○									○	7.12～8.3
日本語・日本文化教育センター・教授	土谷 桃子	○				○						○			7.4～9.3
日本語・日本文化教育センター・教授	吉成 祐子						○			○					-
日本語・日本文化教育センター・助教	松尾 憲暁				○								○		-
国際事業課長	古田 知美	○	○	○	○		◎	◎	○	○			○	○	7.4～9.3
国際総務室長	加藤 洋平	○		○	○		○	○						○	7.4～9.3
留学支援室長	野村 友里	○			○	○	○	○					○		7.4～9.3
教育学部・教授	巽 徹	○				○					◎				7.4～9.3
教育学部・教授	仲 潔					○					○				7.4～9.3
教育学部・准教授	林 日佳理					○					○				7.4～9.3
地域科学部・教授	笠井 千勢					○					○				7.4～9.3
地域科学部・教授	神谷 宗明	○				○					○				7.4～9.3
医学系研究科・医学部・教授	西城 卓也	○						○							7.4～9.3
医学部・看護学科・准教授	久我原朋子	○													7.4～9.3
医学系研究科・医学部・准教授	山川 路代			○				○	○						7.4～9.3
工学部・教授	嶋 睦宏	○	○	○		◎					○	○			7.4～9.3
工学部・教授	久米 徹二	○		○	○		○		◎	○				○	7.4～9.3
工学部・教授	伊藤 聡			○											7.4～9.3
工学部・教授	伊藤 貴司			○											7.4～9.3
工学部・教授	王 道洪			○											7.4～9.3
工学部・教授	小宮山正治			○											7.4～9.3
工学部・教授	高橋 周平			○											7.4～9.3
工学部・教授	杓水 祥一			○	○										7.4～9.3
工学部・教授	上宮 成之			○											7.4～9.3
工学部・教授	加藤 邦人			○											7.4～9.3
工学部・教授	瀬瀬 守			○											7.4～9.3
工学部・教授	武野 明義			○											7.4～9.3
工学部・教授	伴 隆幸			○											7.4～9.3
工学部・教授	伊藤 和晃			○											7.4～9.3
工学部・教授	山下 実			○											7.4～9.3
工学部・教授	小林 信介			○	○									○	7.4～9.3
工学部・教授	岡 夏央			○											7.4～9.3
工学部・教授	新田 高洋			○		○						○			6.4～8.3

所 属 ・ 職 名 等	氏 名	運 営 委 員 会	奨 学 金 等 選 考 委 員 会	部 門				国 際 企 画 部 門 W G	年 報	H P	短 期 派 遣 チーム	短 期 受 入 チーム	愛 知 留 学 生 就 職 支 援 コ ン ソー シ ャ ム プ ロ ジ ェ ク ト チーム	J D シ ン ボ ジ ム W G	任 期
				国 際 協 働 教 育 推 進 部 門	地 域 国 際 化 推 進 部 門	留 学 推 進 部 門	国 際 企 画 部 門								
工学部・教授	毛利 哲也					○	○	○				○			64～83
工学部・准教授	高橋 康宏			○											74～93
工学部・特任教授	木下 幸治				○									○	74～93
工学部・准教授	小島 悠揮					○						○			74～93
工学部・准教授	山田 啓介			○										○	74～93
工学部・准教授	佐野 栄俊			○											74～93
工学部・助教	須網 暁			○											64～83
工学部・准教授	吉田 道之					○									74～93
応用生物科学部・教授	海老原章郎	○		○	◎								◎	○	64～83
応用生物科学部・教授	西津 貴久			○	○		○								74～93
応用生物科学部・教授	上野 義仁			○											74～93
応用生物科学部・教授	矢部 富雄			○											74～93
応用生物科学部・教授	中川 智行	○		◎			○							○	74～93
応用生物科学部・教授	柳瀬 笑子	○		○	○										74～93
応用生物科学部・教授	山本 義治			○											74～93
応用生物科学部・教授	小林佑理子			○		○					○				74～93
応用生物科学部・准教授	島田 昌也			○	○										74～93
応用生物科学部・教授	清水 将文			○	○										74～93
応用生物科学部・准教授	鈴木 史朗	○			○									○	74～93
応用生物科学部・准教授	勝野那嘉子			○											74～93
応用生物科学部・准教授	北口 公司			○											74～93
応用生物科学部・准教授	今泉 鉄平			○	○										74～93
応用生物科学部・准教授	広田 勲					○						○			74～93
応用生物科学部・准教授	山内 恒生			○		○						○			74～93
応用生物科学部・助教	中川 香澄			○											74～93
応用生物科学部・助教	橋本 美涼			○											74～93
社会システム経営学環・准教授	山縣 弘忠	○													74～93
社会システム経営学環・助教	川瀬 真弓					○					○				74～93
共同獣医学研究科・教授	志水 泰武	○													74～93
連合農学研究科・教授	中野 浩平	○		○											74～93
連合創薬医療情報研究科・准教授	遠藤 智史	○													74～93
地域協学センター・准教授	大宮 康一			○	○										74～93
高等研究院・准教授	尾関 智恵						○	○							64～83
人事企画課主幹	後藤 康之						○								74～93
教務課長	有川 美香						○								54～73
学務部長	野々村晴子	○												○	64～83
国際総務室国際総務係	前田 浩輔			○	○		○	○	○	○				○	
	宮本亜由子														
	柿田 実子														
留学支援室留学支援係	岡本 竜太		○	○	○	○	○				○	○	○		
	脇田ななこ														
	小林 拓哉														

R7.4当時の役職を記載 ※グローバル推進機構長、委員長、部門長、専攻長、リーダーは◎



2. 協定一覧

●大学間協定（20ヵ国51大学）

2026年3月31日現在

	大学・機関名	国・地域名	協定締結日	授業料相互 不徴収	交換可能 学生数*
1	カンピーナス大学	ブラジル	1984.8.27	有	2
2	サンディエゴ州立大学	米国	1985.5.7	有	2**
3	浙江大学	中国	1986.4.21	有	3
4	広西大学	中国	1986.4.24	有	4
5	電子科技大学	中国	1986.7.21	有	2
6	江南大学	中国	1986.9.3	有	3
7	ノーザンケンタッキー大学	米国	1990.9.26	有	2
8	ソウル科学技術大学校	韓国	1992.3.19	有	3
9	グリフィス大学	オーストラリア	1995.3.3	有	4
10	ユタ州立大学	米国	1997.5.29	有	2
11	ハノイ工科大学	ベトナム	1998.6.26	有	2
12	カセサート大学	タイ	1999.8.5	有	3
13	内蒙古農業大学	中国	2000.8.8	有	2
14	シドニー工科大学	オーストラリア	2000.8.14	有	3
15	パンノン大学	ハンガリー	2001.3.2	有	3
16	アングラス大学	インドネシア	2001.4.23	有	4
17	バングラデシュ農業大学	バングラデシュ	2001.8.23	有	2
18	エルフルト大学	ドイツ	2002.12.4	有	3
19	吉林大学	中国	2003.5.20	有	4
20	チェンマイ大学	タイ	2003.8.4	有	3
21	ダッカ大学	バングラデシュ	2004.6.17	有	3
22	キングモンクット工科大学トンブリ校	タイ	2005.1.10	有	3
23	華僑大学	中国	2005.3.29	有	3
24	同済大学	中国	2006.3.16	有	2
25	ランボン大学	インドネシア	2006.4.25	有	2
26	内蒙古大学	中国	2007.2.6	有	1
27	パイロイト大学	ドイツ	2008.8.22	有	4
28	ベンハー大学	エジプト	2009.3.18	有	2
29	高麗大学校	韓国	2010.1.15	有	2
30	カウナス工科大学	リトアニア	2010.3.8	有	4
31	ボゴール農科大学	インドネシア	2010.12.2	有	3
32	内蒙古師範大学	中国	2011.6.8	有	2
33	ヴィータウタス・マグヌス大学	リトアニア	2012.1.19	有	2
34	ガジャマダ大学	インドネシア	2012.9.13	有	3
35	スプラス・マレット大学	インドネシア	2013.7.8	有	3
36	パリ・サクレ大学	フランス	2014.12.16	有	3
37	インド工科大学グワハティ校	インド	2014.9.21	有	3
38	マレーシア国民大学	マレーシア	2016.9.21	有	2
39	マギル大学	カナダ	2017.3.8	無	－
40	アルバータ大学	カナダ	2017.3.21	無	－
41	レイクヘッド大学	カナダ	2017.10.11	有	2
42	マリアノ・マルコス州立大学	フィリピン	2018.9.10	有	2
43	フエ大学	ベトナム	2018.11.12	有	2
44	アッサム大学	インド	2018.11.20	有	2

	大学・機関名	国・地域名	協定締結日	授業料相互 不徴収	交換可能 学生数*
45	サラマンカ大学	スペイン	2018.11.26	有	2
46	リール大学	フランス	2020.4.2	有	4
47	南フロリダ大学	米国	2020.12.15	無	-
48	ブラヴィジャヤ大学	インドネシア	2021.2.23	有	2
49	バンドン工科大学	インドネシア	2022.09.26	有	3
50	ラバト国際大学	モロッコ	2024.7.8	有	2
51	シーナカリンウィロート大学	タイ	2025.3.27	有	2

※毎年、1学年度の間に派遣または受入可能な最大限の人数を表しています。 ※※1年2名、半期4名

●部局間協定 (29ヵ国1地域61部局)

2026年3月31日現在

協定部局	協定大学等名	国名	初回締結日	授業料相 互不徴収	交流対象者
教育学部	カールスルーエ教育大学	ドイツ	2015.10.21	有	学生・教員
	山西師範大学	中国	2015.12.7	有	学生・教員
地域科学部	国立中央大学文学院	台湾	2021.1.14	有	学生・教員
医学部	浙江大学医学院	中国	2000.12.4	有	学生・教員
	コンケン大学医学部	タイ	2000.12.18	有	学生・教員
	忠北大学校医学部	韓国	2009.4.17	有	学生・教員
	ハワイ大学医学部	米国	2016.8.24	有	学生・教員
	ソウル大学校医科大学	韓国	2019.4.11	無	学生・教員
	シカゴ大学医学部	米国	2019.6.3	無	学生・教員
医学部・保健管理センター	南フロリダ大学医学学群	米国	2016.10.20	無※ ¹	教員※ ²
医学系研究科	サマルカンド国立医科大学	ウズベキスタン	2025.8.25	無	学生・教員
工学部	全南大学校工学部	韓国	2002.2.6	有	学生・教員
	柳韓大学校工学系列	韓国	2010.9.29	有	学生・教員
	ベンクル大学数学自然科学部	インドネシア	2011.7.20	有	学生・教員
	忠南大学校工学部	韓国	2013.1.18	有	学生・教員
	マドリッド・カルロス三世大学工学部	スペイン	2013.7.9	有	学生・教員
	ドルトムント工科大学機械工学部	ドイツ	2014.6.23	有	学生・教員
	デダンキマティ工科大学工学部	ケニア	2014.12.16	有	学生・教員
	トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学理工学部	マレーシア	2014.12.16	有	学生・教員
	慶北大学校工学部	韓国	2015.2.27	有	学生・教員
	ブンハッタ大学	インドネシア	2015.7.30	有	学生・教員
	パダン州立大学数学自然科学部	インドネシア	2015.9.18	有	学生・教員
	クラクフ工科大学環境電力工学部	ポーランド	2015.11.30	有	学生・教員
	チュラロンコン大学理学部	タイ	2015.12.2	有	学生・教員
	南京師範大学 エネルギー機械工学院	中国	2017.7.17	有	学生・教員
	ダゴン大学自然科学系学部	ミャンマー	2017.7.21	有	学生・教員
	インドネシア・イスラム大学土木工学・計画学部、数学・自然科学部	インドネシア	2018.2.23	無	学生・教員
	ブルネイ・ダルサラーム大学理学部	ブルネイ・ダルサラーム	2018.6.15	有	学生・教員
	ザンビア大学工学部	ザンビア	2019.1.30	有	学生・教員
	リアオ大学教員養成・教育学部	インドネシア	2020.3.3	無	教員
	長庚大学工学部	台湾	2020.3.18	有	学生・教員
	タイ国立電子コンピューター技術研究センター	タイ	2023.1.29	無	教員
	ジョモケニヤッタ農工大学	ケニア	2023.8.1	有	学生・教員



協定部局	協定大学等名	国名	初回締結日	授業料相互不徴収	交流対象者
工学部・地方創生エネルギーシステム研究センター	東ティモール国立大学工学部	東ティモール	2016.8.29	有	学生・教員
インフラマネジメント技術研究センター	中国科学院水利部水土保持研究所	中国	2008. 8.12	無	教員
	中国水利水電科学研究院岩土工程研究所	中国	2009. 7.24	無	教員
応用生物科学部	チュラロンコン大学理学部	タイ	1994. 3.15	無	学生・教員
	コンケン大学農学部	タイ	2000. 3.27	無	学生・教員
	コンケン大学学部間共同開発研究所	タイ	2000. 3.27	無	学生・教員
	国立獣医科学検疫院獣医科学研究所	韓国	2008.11. 4	無	教員
	モンゴル国立大学地理地質学部	モンゴル	2012.10.29	無	教員
	ガーナ大学基礎応用科学部	ガーナ	2015.8.20	無	教員
	ラジシャヒ大学農学部	バングラデシュ	2016.12.27	無	教員
	南太平洋大学自然科学・工学・環境学群	フィジー	2017.12. 1	無	教員
	カザン連邦大学環境科学部	ロシア	2018.5.18	無	教員
	カザン医学アカデミー	ロシア	2018.12.10	無	教員
	ハンガリー科学アカデミー農学研究センター	ハンガリー	2018.12.10	無	学生・教員
連合農学研究科	チュラロンコン大学理学部	タイ	2012.12. 6	有	学生・教員
	チュイロイ大学	ベトナム	2015.6.25	有	学生・教員
	ラオス国立大学林学部	ラオス	2018.3.21	有	学生・教員
	キングモンクット工科大学ラカバン校産業教育学部	タイ	2023.8. 9	有	学生・教員
	ラジャスタン大学生命科学研究科	インド	2024.6.27	有	学生・教員
連合獣医学研究科・共同獣医学研究科	ガーナ大学基礎応用科学部	ガーナ	2015.8.20	無	教員
連合創薬医療情報研究科	カフル・エル・シェイク大学獣医学部	エジプト	2009.11.15	有	学生・教員
	タイビン医科薬科大学医・薬科学技術センター	ベトナム	2020.3.31	無	学生・教員
	トリノ大学	イタリア	2025.3.18	有	学生・教員
複合材料研究センター	EMC 2 クラスター・IRT ジュール・ヴェルヌ	フランス	2014.3.13	無	学生・教員
地域連携スマート金型技術研究センター	台湾国立高雄科技大学先端金型研究開発センター	台湾	2019.12.27	無	学生・教員
科学研究基盤センター	タイビン医科薬科大学医・薬科学技術センター	ベトナム	2020.3.31	無	教員
糖鎖生命コア研究所	マッコーリー大学	オーストラリア	2025.4. 1	無	教員
糖鎖生命コア研究所	グライコネット	カナダ	2025.5.27	無	教員

※ 1, 2 南フロリダ大学との「医療従事者交流プログラム」においては、授業料等相互不徴収：有、交流対象者：学生・教員

3. 本学の国際関連活動

●学長表敬訪問（来訪）

日付	国・地域	訪問者	目的
4.2～5	アメリカ (南フロリダ大学、 タンパ総合病院、タンパ市)	(南フロリダ大学) レア・ロー学長、プレサント・モハバトラ 学長代理教務担当副学長、ベイジ・ギアーズ 学長室チーフ、ターニャ・ヴォマツカ 副学長代理、シンディ・デルーカ 副学長 (学生支援担当)、キキ・カルーソン 副学長 (国際担当) USF ワールド、レネ・サンチェス USF ワールド 副所長 (国際担当)、サカイ アツコ オナーズカレッジ教育教授、チャールズ・ロックウッド 副学長 (USF ヘルス)・医学部長、アンドレ・スピツァー 副学長補佐兼副部長 (USF ヘルス)、オクダ・ハル 理事長 (医療教育シミュレーションセンター)、リネット・メネゼス 副学長補佐 (USF ヘルスインターナショナル)、ジェシー・カサノバ 副所長 (USF ヘルスインターナショナル) (タンパ総合病院) ステイシー・ブランド 副病院長兼最高管理責任者、クアレタ・キヴェット 副病院長 (人事担当) (タンパ市) アルフレッド・ゴールドバーグ タンパ姉妹都市協会代表、ギド・マニスカルコ タンパ市議会議員	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換、大学間学術交流協定書への署名式
6.17	リトアニア (カウナス工科大学)	モニカー・マジアキーン准教授、ラミンター・スクボーシンスキーン研究員	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
8.25	ウズベキスタン (サマルカンド国立医科大学)	リザエフ・ジャスール・アリムジャンオヴィッチ 学長、リザエフ フェルザ・アブドゥラヒモヴナ氏、クバエフ・アズィズ・サイダリモヴィッチ 科学・イノベーション担当副学長、アフロワ・マリカ・シャフカトヴナ氏、マ馬拉ジャボフ・ソビルジョン・エルガシエヴィッチ 国際教育学部長	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換、部局間学術交流協定書への署名式
10.9	タイ (チェンマイ大学)	ボングラック・スリバンデイトモンコル学長、チャリン・テチャパン 副学長、ウィニター・ブンヨドム副学長、タンヤヌパープ・アナンタナー 副学長、ウォラカンヤ・プラナファッタナー学長補佐、ユタナー・フィモルシリボル農産学学部長	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換、大学間学術交流協定書への署名式
12.3	インド (インド工科大学)	ジャリハル学長、スマナ・ドゥッタ教授、チャンドン・ダス教授、ラマリンガム・アナンダラクシュミ准教授	シンポジウムへの参加、表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換、大学間学術交流協定書への署名式
1.7	マレーシア (マレーシア国民大学)	ノリンサン・カミル・オスマン副学長 (学生担当・同窓会担当)、ムニラ・イスMAIL HEP-UKM 開発担当副ディレクター、ヌル・イザティ・アブ・ラーマン HEP-UKM 企業連携・ネットワーク・出版ユニット長 (部門長)、ムハンマド・アディブ・ビン・アブドゥル・ラザク氏、学生3名	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
3.18	インド (インド工科大学)	パラメスワール・K・アイヤー教授、リンカー・クマール・ミッタル助教、ウジェンドラ・クマール・コマル助教	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換
3.24	インド (インド工科大学)	ウトバル・ボラ教授、サブラタ・クマール・マジュムダー教授、ラマリンガム・アナンダラクシュミ准教授、チランジブ・スール助教、	表敬あいさつ、国際交流に関する意見交換

●学長表敬訪問（往訪）

日付	国・地域	訪問先	目的
9.8～9.15	マレーシア、 インドネシア	マレーシア国民大学・マラヤ大学・在マレーシア日本大使館・アンダラス大学	表敬あいさつ、協力意向書への署名、国際交流に関する意見交換
3.7～3.11	インド	インド工科大学グワハティ校	グワハティ JDP シンポジウムへの参加、意向表明書署名



●令和7年度国際関連事業一覧

2026年3月31日現在

開始	終了	名称	参加人数	主催
4月3日	4月4日	南フロリダ大学表敬訪問＋協定更新調印式	38	グロ
4月16日		新規渡日留学生オリエンテーション	31	グロ
4月16日		海外留学フェア2025春	44	グロ
4月23日		短期研修プログラム（派遣）説明会	73	グロ
5月13日		ノースカロライナ大学ジェレミー教授見学	1	航空宇宙C
5月14日		郡上踊りワークショップ	26	グロ（日文）
5月20日		リトアニア勉強会「リトアニアを旅する：観光スポット紹介」	19	グロ
5月26日		GHS 国際交流イベント	60	工学
6月10日		医学部海外臨床実習報告会	43	保健管理センター・医学（MEDC）
6月12日		Meet up Chubu	257	グロ / 中部経済産業局
6月18日		サマースクール（派遣）事前研修（第1回）	30	グロ
6月18日	7月16日	岐阜大学サマースクール2025	13	グロ
6月22日		令和7年度宇宙工学講座開校式	140	地協、工学・宇宙利用C、岐阜県
6月24日		リトアニア勉強会「リトアニア伝統衣装」	23	グロ
6月25日		サマースクール（派遣）事前研修（第2回）	31	グロ
6月25日		南フロリダ大学学生交流のための鵜飼ツアー（医学部生のみ）	6	保健管理センター、医学（MEDC）
6月26日		南フロリダ大学学生・医学科学学生交流授業（医学部生のみ）	110	保健管理センター、医学（MEDC）
6月28日		English OSCE	26	医学（MEDC）
7月2日		海外渡航時の危機管理オリエンテーション	75	グロ
7月9日		サマースクール（派遣）事前研修（第3回）	26	グロ
7月9日		能楽ワークショップ	46	グロ（日文）
7月14日		GU-GLOCAL シンポジウム	312	グロ
7月16日		サマースクール（派遣）事前研修（第4回）	22	グロ
8月	12月	CVMP	12	グロ
8月2日		三重大学招待 留学生鈴鹿サーキット1日招待旅行	35	三重大学
8月3日		日本語・日本文化研修留学生修了論文発表会	18	グロ（日文）
8月6日		CVMP キックオフミーティング	14	グロ
8月8日	9月5日	カリフォルニア大学デービス校 EST プログラム（アメリカ）	2	グロ
8月19日	8月23日	忠北大学・岐阜大学 医学部生交流会	13	日韓交流会・MEDC
8月22日	9月7日	リトアニア NOW2025	－	岐阜県
8月23日		リトアニア NOW 特別講演「はじめてのリトアニア語」	23	グロ
8月25日		サマルカンド国立医科大学表敬訪問、協定書署名	6	医学、航空宇宙C（見学）
8月29日	9月28日	グリフィス大学 ESL プログラム（オーストラリア）	19	グロ
8月30日	9月28日	アルバータ大学 ESL プログラム（カナダ）	18	グロ
8月31日	9月28日	カリフォルニア大学サンディエゴ校 ESL プログラム（アメリカ）	2	グロ
9月1日		保健管理センター開設50周年記念 岐阜大学シンポジウム ～ 大学のウェルネス ～（米国大学保健管理協会（ACHA）CEO 特別講演）	約470	保健管理センター
9月1日		全国大学 JDP 協議会 幹事会（オンライン）	22	JDP 協議会
9月8日	9月15日	マレーシア・インドネシア出張（UKM、UM、在マレーシア日本国大使館、UNAND）	5	グロ
10月2日		全国大学 JDP 協議会 総会（オンライン）	111	JDP 協議会
10月2日		日印留学推進プラットフォーム	4	東京大学
10月22日		春の短期研修プログラム説明会	25	グロ

開始	終了	名称	参加人数	主催
10月9日		チェンマイ大学表敬訪問、協定更新署名	6	グロ、航空宇宙C(見学)
10月15日		新規渡日留学生オリエンテーション	54	グロ
10月16日	10月25日	岐阜県医師育成・確保コンソーシアム海外臨床教育FD(カナダマギル大学研修)	—	岐阜県、医学
10月17日		対日理解促進事業 JENESYS2025岐阜大学訪問	50	グロ、JICE
10月29日	11月1日	日本ウズベキスタン学長会議参加	2	名古屋大学
10月31日		留学生見学旅行	13	グロ
11月8日		モネの池テラス(次世代地域リーダー育成プログラムグローバルリーダーコース)	—	グロ
11月9日		郡上市地域振興推進事業(伝統文化海外発信支援事業)	32	グロ(日文)
11月10日		IC-GU ラウンドテーブルミーティング@静岡大学(ハイブリッド)	31	連農
11月11日		国際園芸学会(ASQP2025)@静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ	—	連農
11月13日	11月20日	日印大学等フォーラム参加、IITG 訪問	4	JST
11月19日		海外留学フェア秋	15	グロ
11月20日		大学の世界展開力強化事業(インド太平洋)2025年度 第一回採択校連絡会	4	幹事校: 広島大学
11月26日		岐阜地区ワークショップ	35	グロ
12月3日	12月18日	Winter School	9	グロ
12月3日	12月18日	AI4GLOCAL Ideathon Program	3	グロ
12月4日		岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2025 学術セッション	49	グロ
12月5日		岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2025 東海国立大学機構 JDP シンポジウム	95	東海国立大学機構
12月5日		岐阜ジョイント・ディグリーシンポジウム2025 産官学金連携セッション	114	グロ、航空宇宙C(見学)
12月10日		十二単の着装と体験	51	グロ(日文)
12月11日		CVMP2025ファイナルコンペティション	46	グロ
12月18日		The 6th GILP Symposium Winter	20	GILP
12月23日		リトアニア勉強会「クリスマスの伝統文化を中心に」	13	グロ
1月7日		マレーシア国民大学(UKM)表敬・学生交流	7	グロ・航空宇宙C(見学)
2月5日	2月6日	The 8th International Conference on Food and Applied Bioscience 2026	—	チェンマイ大学
2月12日		マイクロクレデンシャル勉強会	31	グロ
2月14日	2月15日	ICFAST TOKYO2026(小山機構長講演)	1	インド大使館、東京大学他
2月15日	3月22日	アルバータ大学 EST プログラム(カナダ)	4	グロ
2月15日	3月22日	アルバータ大学 EEFN プログラム(カナダ)	1	グロ
2月15日	3月22日	アルバータ大学 ESL プログラム(カナダ)	6	グロ
2月16日	3月31日	南フロリダ大学とのオンライン共修	9 学生 3 教員	地域科学
2月28日	3月16日	Spring School Program	10	グロ
2月28日	3月19日	AI4GLOCAL Ideathon Program	3	グロ
3月1日	3月5日	ノースカロライナ州立大学	6	航空宇宙C
3月3日		リトアニア勉強会「リトアニア短期留学1か月のリアルな体験談」	17	グロ
3月9日	3月10日	グワハティシンポジウム	190	グロ・IITG
3月23日		GEP2025 Final Presentations(GEP 報告会)	27	グロ
3月31日	3月31日	「バロー・V ドラッグ海外研修奨学金」留学報告会	2	グロ
合計		79 件		

※参加人数について、来訪の場合は来訪者人数



4. 大学間学術交流協定先との交流状況

種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
アメリカ	サンディエゴ州立 大学	2023	1	0	1	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	0
	ノーザンケンタッキー 大学	2023	1	1	10	4
		2024	1	0	7	6
		2025	0	0	3	5
	ユタ州立大学	2023	2	0	0	0
		2024	0	0	1	0
		2025	0	0	0	0
	南フロリダ大学	2023	13	1	3	0
		2024	7	4	4	47
		2025	14	15	5	41
小 計			39	21	34	103
インド	アッサム大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	1	0	0
		2025	0	1	0	0
	インド工科大学 グワハティ校	2023	19	5	18	0
		2024	19	4	15	19
		2025	26	12	17	19
小 計			64	23	50	38
インドネシア	アンダラス大学	2023	0	1	0	0
		2024	1	4	0	1
		2025	5	5	0	0
	ガジャマダ大学	2023	0	0	0	0
		2024	2	1	2	2
		2025	1	1	0	2
	スブラス・マレット 大学	2023	2	3	0	0
		2024	0	4	0	2
		2025	0	0	0	5
	バンドン工科大学	2023	1	0	4	0
		2024	2	0	4	4
		2025	2	3	3	4
	ブラヴィジャヤ大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	2
	ボゴール農科大学	2023	0	1	0	0
		2024	2	2	5	1
		2025	4	1	12	3
	ランボン大学	2023	0	0	0	0
		2024	2	0	0	0
		2025	0	0	0	0
小 計			24	26	30	26

種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
エジプト	ベンハー大学	2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	1
		2025	0	0	0	1
	小 計		0	0	0	4
オーストラリア	グリフィス大学	2023	2	0	36	0
		2024	3	0	31	0
		2025	0	0	20	1
	シドニー工科大学	2023	0	0	1	0
		2024	1	0	3	0
		2025	0	0	1	0
	小 計		6	0	92	1
カナダ	アルバータ大学	2023	2	0	14	0
		2024	2	0	32	0
		2025	1	0	29	0
	マギル大学	2023	4	0	0	0
		2024	1	1	0	0
		2025	10	1	0	0
	レイクヘッド大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	0
	小 計		20	2	75	0
韓国	高麗大学校	2023	0	0	0	0
		2024	1	0	0	0
		2025	0	0	0	0
	ソウル科学技術 大学校	2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	3
		2025	0	0	0	2
	小 計		1	0	0	7
スペイン	サラマンカ大学	2023	0	0	0	1
		2024	0	0	0	2
		2025	0	0	0	0
	小 計		0	0	0	3
タイ	カセサート大学	2023	1	1	0	2
		2024	1	0	0	4
		2025	1	0	1	3
	チェンマイ大学	2023	0	0	5	0
		2024	0	0	2	0
		2025	1	6	4	4
	キングモンクット 工科大学トンブリ校	2023	0	1	1	0
		2024	2	0	2	0
		2025	0	0	0	1
	シーナカリンウィ ロート	2023	-	-	-	-
		2024	0	19	0	0
		2025	0	0	13	0
	小 計		6	27	28	14

種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
中国	内蒙古師範大学	2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	1
		2025	0	0	0	0
	内蒙古大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	0
	内蒙古農業大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	0
	華僑大学	2023	0	0	0	3
		2024	0	0	0	3
		2025	0	0	0	5
	吉林大学	2023	0	0	0	1
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	1
	広西大学	2023	0	0	0	5
		2024	0	0	0	5
		2025	0	3	0	1
	江南大学	2023	0	0	0	2
		2024	0	0	0	2
		2025	0	1	0	2
	浙江大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	1	0	0
	電子科技大学	2023	0	0	0	3
		2024	0	0	0	2
		2025	0	0	0	1
	同済大学	2023	0	0	1	0
		2024	1	0	0	0
		2025	1	0	0	0
	小 計		2	5	1	39
ドイツ	エルフルト大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	2
	バイロイト大学	2023	0	0	0	0
		2024	1	0	2	0
		2025	0	0	1	1
	小 計		1	0	3	3
ハンガリー	パンノン大学	2023	1	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	0
	小 計		1	0	0	0
バングラデシュ	ダッカ大学	2023	0	2	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	0	0	0
	バングラデシュ農業大学	2023	0	0	0	0
		2024	1	1	0	0
		2025	0	0	0	2
	小 計		1	3	0	2

種 別			教職員 派遣	教職員 受入	学生 派遣	学生 受入
フィリピン	マリアノ・マルコス 州立大学	2023	0	8	0	0
		2024	0	0	1	0
		2025	0	0	0	0
	小 計		0	8	1	0
ブラジル	カンピーナス大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	1	0	0	0
	小 計		1	0	0	0
フランス	パリ・サクレ大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	1	1
		2025	0	0	0	3
	リール大学	2023	8	7	1	4
		2024	10	4	0	3
		2025	4	2	6	6
	小 計		22	13	8	17
ベトナム	ハノイ工科大学	2023	1	1	0	0
		2024	2	0	0	2
		2025	3	1	1	2
	フエ大学	2023	7	0	10	1
		2024	2	0	6	1
		2025	1	0	6	1
小 計		16	2	23	7	
マレーシア	マレーシア国民大学	2023	5	8	4	2
		2024	2	1	1	4
		2025	10	5	1	5
	小 計		17	14	6	11
モロッコ	ラバト国際大学	2023	-	-	-	-
		2024	2	7	0	0
		2025	0	0	0	0
	小 計		2	7	0	0
リトアニア	ヴィータウタス・ マグヌス大学	2023	1	2	2	0
		2024	5	2	0	0
		2025	1	0	2	2
	カウナス工科大学	2023	0	0	0	0
		2024	0	0	0	0
		2025	0	1	1	0
	小 計		7	5	5	2
合 計		2023	71	42	111	34
		2024	73	55	119	116
		2025	86	59	126	127
総 計			230	156	356	277



5. 海外オフィス・研究施設

●岐阜大学海外オフィス

設置場所	国・地域	設置時期
岐阜大学上海オフィス	中国	2009年 5 月
岐阜大学ダッカ大学内オフィス	バングラデシュ	2009年 8 月
岐阜大学スプラス・マレット大学オフィス	インドネシア	2014年12月
岐阜大学広西大学内オフィス	中国	2015年 3 月

●共同研究施設

設置場所	国・地域	設置部門	設置時期
ボゴール農科大学	インドネシア	天然物化学	2014年12月
スプラス・マレット大学	インドネシア	環境科学	2014年12月
ダッカ大学	バングラデシュ	生化学	2015年10月
カセサート大学	タイ	微生物学	2016年 2 月
アンダラス大学	インドネシア	ポストハーベスト工学	2016年11月
キングモンクット工科大学トンブリ校	タイ	ポストハーベスト工学	2017年 9 月

6. 国際共同研究等の採択実績

●（公財）田口福寿会助成金

〈国際学術交流採択一覧〉

公益財団法人田口福寿会助成事業の助成金により、本学と学術交流協定を締結している外国の大学との交流を促進し、教育・研究の向上を図るため、協定大学との共同研究を行う者に対して助成を行っている。

区分	採択者	学術交流先	研究課題等	派遣・招へい期間
派遣	応用生物科学部 大場伸也 (教授)	シーナカリンウィロート大学 (タイ)	学生の海外研修の引率	2025年 8 月23日 ～ 2025年 8 月30日 (8 日間)
	医学部 山川路代 (准教授)	チュラロンコン大学医学部予 防・社会医学分野 コンケン大学医学部	グローバル教育体験下の健康管理：タイ留学日 本人学生の疾病予防に関する縦断的研究	2025年 7 月 6 日 ～ 2025年 7 月13日 (8 日間)
	保健管理センター 堀田亮 (准教授)	南フロリダ大学 (アメリカ)	日米の大学生の精神的健康度の国際比較研究に 関する打ち合わせと進捗確認、大学生の自殺予 防プログラム「Campus Connect」の実地見学及 び日本への導入に向けた意見交換と継続的交流 の確約	2025年 5 月31日 ～ 2025年 6 月 5 日 (6 日間)
	高等研究院 微生物遺伝資源保存センター 林将大 (助教)	チュラロンコン大学医学部 予防・社会医学分野 (タイ)	タイ留学日本人学生の薬剤耐性菌による暴露に 関する縦断的研究に向けて	2025年 7 月 8 日 ～ 7 月13日 (6 日間)
招へい	地域科学部 牧秀樹 (教授)	ダッカ大学 (バングラデシュ)	新たな世界基準の最小英語テスト (The Minimal English Test = MET) の開発	2025年 9 月29日 ～ 2025年10月10日 (12日間)

※職名は採択時のもの。

〈国際協働プロジェクト型学修プログラム事業〉

本学が学術交流協定を締結している海外大学（特にインド・マレーシア）との連携を強化するため、令和2年度よりオンラインによる国際協働プロジェクトを推進する教育プログラムを実施しており、令和7年度より公益財団法人田口福寿会助成事業の助成金を受けている。

事業名	学術交流先	実施内容	期間
「GU × IITG × UKM Collaborative Video Making Program」	インド工科大学（インド）、 マレーシア国民大学（マレー シア）	本学（5名）、インド工科大学グワハティ校（2名） およびマレーシア国民大学（2名）の学生が3 グループに分かれ動画の共同制作を行い、ファ イナルコンペティションにて最終発表を行った。	2025年 8 月 ～ 2026年 1 月 (6 か月間)

7. 留学生の地域貢献

●留学生の地域イベント等への派遣実績

件数	日時	事業名	主催者	参加人数
1	2025年5月～ (週1回/35回)	ECF (イングリッシュ・コミュニケーション・フレンド)	北方町教育委員会	3
2	2025年6月27日	関商工高等学校の生徒と岐阜大学の留学生との交流プログラム	地域連携推進本部地域協学センター・グローバル推進機構との共同開催	14
3	2025年7月2日	鶴飼交流会	国際ソロプチミスト岐阜	17
4	2025年7月6日	多文化共生フォーラム ～各国の「違い」を尊重し共に生きる社会とは?～ ～世界の人たちはどうやって外国語(英語)を学んでいるの?～	岐阜県世界青年友の会	1
5	2025年11月23日	第420回市民の劇場 松竹大歌舞伎	岐阜市民会館、公益財団法人 岐阜市国際交流協会	33
6	2025年12月13日	中学生との国際交流会	岐阜大学教育学部附属小中学校	23
7	2025年12月14日	ホームビジット	岐阜市国際交流協会	7
8	2025年12月16日	クリスマスプレゼント会	国際ソロプチミスト岐阜	37
9	2026年1月21日	国際理解講座 ～「岐阜大学留学生招へい」交流事業～	岐阜県世界青年友の会 (大垣市立日新小学校)	6
10	2026年3月7日	Gifu City Future Talk	岐阜市国際交流協会	9

8. 令和7年度における各種広報資材

●国際協働教育推進関連

(1) 岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2025

7回目となるジョイント・ディグリーシンポジウムはオンライン及び一部対面で開催。

岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2025
メインシンポジウム フライヤー (A4,1P)



岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2025
産官学学連携セッション フライヤー (A4,1P)



岐阜ジョイント・ディグリープログラムシンポジウム 2025
学術セッション フライヤー (A4,1P)



(2) GILP Symposium

JDP の学生が企画・運営し、IITG との共催により開催したサテライトシンポジウム。

GILP Symposium 2025 Winter
フライヤー (A4,1P)



(3) Collaborative Video Making Program (CVMP)

令和2年度より開催しているオンラインによるジョイント・ディグリー協定校間学生交流プログラム。

CVMP 2025 学生募集用フライヤー (A4,1P)
日英で作成。





CVMP 2025 Final Competition フライヤー (A4,1P)
日英で作成。



(4) ウィンタースクール

平成27年度から開催している JD 協定校の IITG 及び UKM からの留学生招へいプログラム。

ウィンタースクール2025 フライヤー (A4,1P)



(5) スプリングスクールプログラム

平成30年度から開催している JD 協定校の IITG への学生派遣プログラム

スプリングスクールプログラム2025 フライヤー (A4,1P)



(6) ウィンタースクール報告書 (A4,10P)

令和7年度ウィンタースクールの活動報告書を作成した。



Overview of the 9th Winter School

Objectives:

In April 2019, Gifu University (GU) launched International Joint Degree Programs (JDP) with both the Indian Institute of Technology, Guwahati (IITG) and Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM). The Winter School provides an opportunity to gain a closer relationship with GU and Japan for students from IITG and UKM who are capable of pursuing graduate studies. The theme of this year's Winter School was Studying the Science of Japanese Food. Participants visited Japanese companies, interacted with Japanese students, engaged in research activities, and experienced Japanese culture. GU hopes that the participants will serve as bridges between IITG/UKM and GU and play an active role in fostering mutual understanding for years to come.

Number of Participants:

7 students from IITG (5 male and 2 female; 4 undergraduate students and 3 master's degree students)
2 students from UKM (1 male and 1 female; 2 master's degree students)

Contents:

- Opening Ceremony
- Gifu Park Tour (Optional)
- Gathering with Gifu University Students (Lunch meeting)
- Joint Degree Symposium and Booth Exhibition
- Laboratory Experience Programs
- Japanese Classes
- Japanese Culture Experience (Arai-Hakko)
- Collaborative Video Making Program Final Competition
- Off-Campus Lecture in Yachioji Town
- Aichi and Tokyo Excursion
- Gathering with High School Students from Gifu City
- Accomplishment Reports and Closing Ceremony



Opening Ceremony

December 3 (Wed.)

The opening ceremony was held in the Faculty of Engineering. After an opening speech by Prof. Dr. Lim Lee Wah, Vice President (Global Outreach, Diversity, Gender and Library) of GU, the participants introduced themselves and enjoyed communicating with other participants, professors, and student tutors.



Gathering with Gifu University Students (Lunch meeting)

December 3 (Wed.)

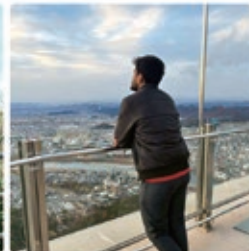
A gathering with GU students was held in the Faculty of Engineering. Winter School participants met GU JDP students, Spring School Program 2026 participants, and student tutors enjoyed talking with each other. The Spring School Program and CVMP are exchange activities for GU, IITG and UKM students. This gathering helped all participants get to know each other.



Gifu Park Tour (Optional)

December 3 (Wed.)

The participants visited Gifu Park with tutors. They enjoyed visiting Gifu Castle and seeing the beautiful view of Gifu City.



Joint Degree Symposium and Booth Exhibition

December 4 (Thu.)

The Joint Degree Symposium 2025 Academic Session on "International Collaboration in Research and Education for Sustainable Future" was held in TOIC (Tokai Open Innovation Complex) GIFU. The participants joined the meeting in person. They put questions to the speakers and gained a deeper understanding.



December 5 (Fri.)

The Joint Degree (JD) Symposium 2025 themed "University Collaboration and Joint Degree in the Global South" was held at the Institute for Glyco-core Research (IGCORE). The participants joined the symposium with English subtitles on the screen. After the symposium, they visited the Booth Exhibition of local companies related to the JD Symposium. They explored the booths and asked questions. After that, they joined a social gathering at TOIC GIFU.





Laboratory Experience Programs

December 8 (Mon.) and December 11 (Thu.)

This program was set up for the participants to learn more about tea leaves. In the first half of the Laboratory Experience, the participants visited the Instrumental Analysis Center on campus, where they received an explanation of the equipment and toured the center. In the second half, they were given an overview of tea leaves and how to use a scanning electron microscope (SEM) to observe its microstructure. Next, they carried out SEM observations. First, they coated a sample of tea leaves with osmium in order to observe them under the SEM, and then each participant experienced operating the SEM to observe tea leaves at the atomic level.



December 9 (Tue.) and December 11 (Thu.)

This program was set up for the participants to learn more about Japanese food science. In the first part of the program, the participants visited the Gifu Prefectural Research Institute for Food Sciences on campus, attended a lecture on the overview of tea leaves, and took a laboratory tour. In the second part, the participants made Japanese sweets and konnyaku. Also, the participants made and tasted Japanese sweets and konnyaku under the guidance of specialists from Japanese sweets and konnyaku making companies, respectively.



Japanese Classes

December 8 (Mon.) and December 9 (Tue.)

Japanese language lessons were provided to the participants by the Center for Japanese Language and Culture. They learned basic Japanese over a total of five hours of lessons.



Japanese Culture Experience (Juni-Hitoe)

December 10 (Wed.)

This event, Juni-Hitoe (single-layered kimono) was held in a wabitsu (Japanese style room) in the Center for Japanese Language and Culture (CJLC). The participants took part in the event with international students studying on the Japanese Language and Culture Studies Course, or on the Japanese Society and Culture Program at CJLC, and other international and Japanese students, faculty and staff members of GU. This beautiful traditional Japanese culture was presented for education and enjoyment for all. To start, there was a lecture about the history and basic details of Juni-Hitoe. Next, there was a demonstration, in which the instructors dressed a student, selected from among volunteers to be the dressing model, in Juni-Hitoe and answered questions from the participants. Finally, those who wished to participate entered the space created inside the Juni-Hitoe after the wearer had slipped out of it whilst preserving its shape. They felt its considerable weight and enjoyed having pictures taken with their friends.



Collaborative Video Making Program Final Competition

December 11 (Thu.)

The Collaborative Video Making Program (CVMP) 2025 Final Competition was held in a hybrid format via Zoom Webinar and at the presentation area in the TOIC Gifu, where the Winter School participants attended. In the CVMP, the students from ITG, UOM, and GU were divided into 3 groups to each shoot a video under the theme of Thinking about "Unique points that can be identified by comparing student life" under the instruction of a creative agency producer in Australia. In the Final Competition, the videos of all the groups were broadcast, each group presenting their own. After that, the viewers and special judges voted to determine the best video. The participants enjoyed watching all the videos: a powerful representation of the collaboration of the students of the three universities.



Off-Campus Lecture in Yaotsu Town

December 12 (Fri.)

This Off-Campus Lecture was set up for the participants to learn more about traditional Japanese food. They visited headlaine Tea Plantation, Yaotsu Town (Gifu). They watched and tried Japanese tea blending and took a tea plantation tour. They also tasted some vinegar samples that the Ushibori Vinegar Brewery in Yaotsu Town kindly provided.



Aichi and Tokyo Excursion

December 15 (Mon.) – December 16 (Tue.)

This excursion was organized to provide the participants with a deeper understanding of Japanese industries and companies. Prior to the excursion, the participants attended a special lecture on Japanese industry and corporate culture on December 10 (Wed.). During the Tokyo excursion, the participants had the opportunity to visit prominent research institutes, companies in Aichi and Tokyo. The itinerary included tours of the Japan Fine Ceramics Center (JAIRC), NGK Insulators, Ltd. (AIRC), Denso Corporation (Tokyo), Nihon Nohyaku Co., Ltd. (Tokyo) and Milbon Co., Ltd. (Tokyo). We extend our sincere gratitude to the staff of these organizations for their warm welcome and support during the visits.



Gathering with High School Students from Gifu City

December 17 (Wed.)

A gathering with Kano High School students was held in the General Education Building on campus. The participants and 40 high school students made 5 groups for group discussions. In the first part of the event, they had a lecture about Global Initiatives of GU from Professor. ESHIMURA Akio, Associate Director of Gifu University Organization for Promotion of Globalization (GU-GLOCAL). In the second part, they had a brief lecture about UOM and the study abroad experiences of JGP students from UOM. Finally, the high school students gave presentations, after which, all students conversed with each other enthusiastically. This gathering helped all participants get to know each other and learn about cultural differences.



Accomplishment Reports and Closing Ceremony

December 18 (Thu.)

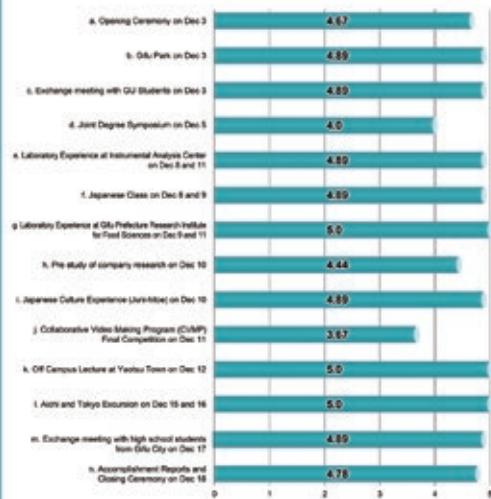
On the final day of the Winter School 2025, the Accomplishment Reports session was held in the Faculty of Engineering. President YOSHIDA Kazuhiko of Gifu University, some professors and some students joined this session. The participants gave poster presentations about the activities in the Winter School. In just two weeks of school activities, the participants had made a lot of progress and displayed confidence in their achievements. Professor KIDYAMA Hiroyuki, Executive Director of GU-GLOCAL, gave small gifts to the top two students. At the Closing Ceremony, Prof. Koyama awarded the Certificate of Completion to each participant. The participants, professors and students had a hard time saying goodbye to one another, and they all hope to meet again.

The 9th Winter School Program marked another successful milestone in the history of our Winter School program.



Questionnaire to Participants of Winter School 2025

1. Satisfaction with the 9th Winter School



2. Comments from Participants

- "The Winter School 2025 was a well-structured and enriching program that balanced academics, cultural exposure, and interaction effectively. It provided valuable learning experiences, meaningful cross-cultural exchanges, and a deeper understanding of Gifu University and Japan. The support system and overall organization made the program both enjoyable and impactful."
- "It was a great opportunity to get to know about Japan. I now have tremendous respect for the Japanese."
- "The Winter School 2025 is an extremely enriching and well-organized program that offered a perfect balance between academic learning, and cultural experiences."



GIFU UNIVERSITY

International General Affairs Office
Gifu University Organization for Promotion of Globalization
1-1 Yanagido, Gifu City, Gifu, JAPAN



●留学促進関連

(1) 海外留学フェア

本学学生に向けた、グローバル推進機構主催を始めとした各種留学プログラムを紹介するイベントを年2回実施。

海外留学フェア2025春 フライヤー (A4,1P)



海外留学フェア2025秋 フライヤー (A4,1P)



(2) 夏の短期研修プログラム説明会

夏休みに開催される海外協定大学への留学プログラムに関する説明会。

2025年度 夏の短期研修プログラム説明会
フライヤー (A4,1P)



(3) 春の短期英語研修プログラム説明会

春休みに開催される海外協定大学への留学プログラムに関する説明会。

アルバータ大学 in カナダ 春の短期英語研修プログラム
フライヤー (A4,1P)



(4) サマースクール（受入）

日本語レベル 初級から N3 レベルの協定大学学生に向けた受入プログラム。

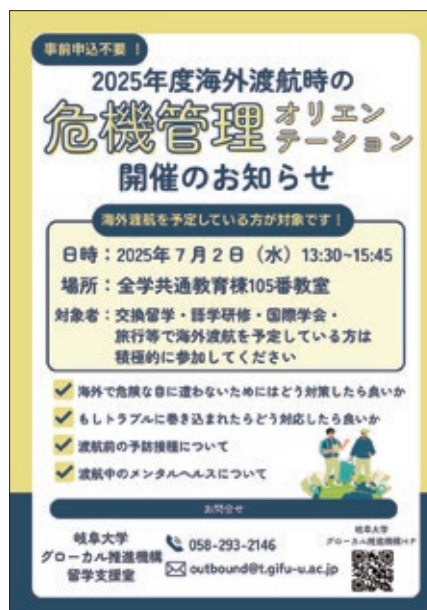
2025年度岐阜大学サマースクール
フライヤー（A4,1P）



(5) 海外渡航時の危機管理オリエンテーション

留学や海外旅行を予定している学生・教職員などを対象とし、幅広く危機管理意識を醸成することを目的として開催しているイベント。

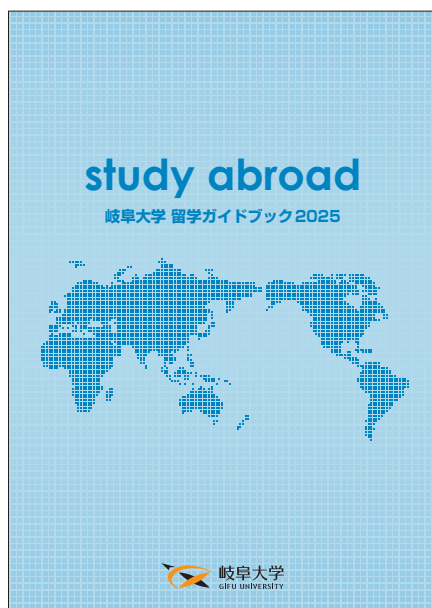
2025年度海外渡航時の危機管理オリエンテーション
フライヤー（A4,1P）



(6) study abroad

本学学生に向けた留学ガイドブックを発行。留学に必要な手続きや協定大学の情報等が掲載されており、本学HP上でも公開している。

study abroad 岐阜大学 留学ガイドブック2025 (A4,32P)



●国際企画関連

(1) NEWS Letter

年2回発行している対外的な広報フライヤー。令和7年度は59号（10月）と60号（3月）を日英でそれぞれ発行。新入生へも配付している。

NEWS Letter 2025 October 59（A4,4P）日英で作成



NEWS Letter 2025 March 60（A4,4P）日英で作成



(2) GU-GLOCAL シンポジウム2025

米アカデミー賞受賞『ゴジラー1.0』やカンヌ国際映画祭受賞『怪物』のプロデューサー山田兼司氏と「IKIGAI」チームを世界に巻き起こした脳科学者で作家の茂木健一郎客員教授、マレーシア出身で岐阜大学の国際展開を牽引するリム・リーワ副学長による GU-GLOCAL シンポジウム「日本の魅力を正しく世界に伝える方法」を実施した。

GU-GLOCAL シンポジウム2025フライヤー（A4,1P）



●留学生就職促進関連

(1) 岐阜地区ワークショップ

愛岐留学生就職支援コンソーシアムと岐阜大学、岐阜県、岐阜県経営者協会、日本貿易振興機構、岐阜県貿易情報センターの共催で外国人留学生を対象としたワークショップを開催した。

2025年度岐阜地区ワークショップ フライヤー (A4,1P)

日英で作成



●広報動画

(1) Glocal Lesson

「地球規模で考えながら地域の課題を解決する」グローバル人材の育成を目指す岐阜大学グローバル推進機構が配信・対面・リアルタイムで提供する学習プログラムを更新した。

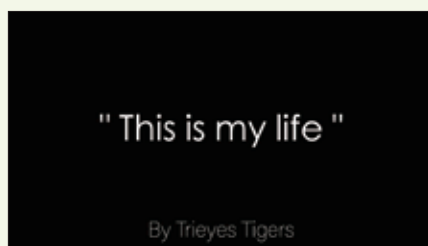
会員登録はこちらから



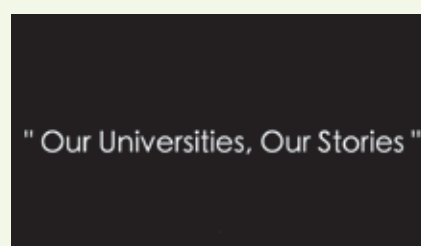
(2) Collaborative Video Making Program

Collaborative Video Making Program に参加した岐阜大学、インド工科大学グワハティ校、マレーシア国民大学の学生が協力して作成した、国際交流促進動画。英語で作成。(3分)

This is my life (Group 2)



Our Universities, our stories (Group 3)



編集後記

2025年度の「岐阜大学国際交流年報」をお届けできることを、大変光栄に存じます。新型コロナウイルス感染症の流行が一定程度落ち着き、社会全体として感染症と共存しながら日常の活動を取り戻しつつある中で、国際交流活動もほぼ通常どおり実施できるようになりました。

IITG・UKM とのウインター／スプリングスクールの継続実施に加え、新規に学部学生対象の「AI4GLOBAL Ideathon Program」を立ち上げ、双方向訪問型の共修を実現しました。さらに、約5か月間の「Collaborative Video Making Program」を通じた3大学協働による映像制作と、ハイブリッド形式のFinal Competition開催は、国際的かつ実践的な学習機会として高い成果を上げることができました。また、Gifu-India Student Community を設立し、日印の学生交流を深めるとともに、その延長線上にGifu Indian Scientists & Engineers Community を組織し、社会人と学生が年齢や立場を超えて交流し、留学生にとってのキャリアモデルに出会える場づくりを進めています。これら一連の取り組みは、学生の国際的視野の育成にとどまらず、大学として地域に根差した国際化を推進し、その成果を地域へ還元する取り組みが着実に進展していることを示しています。本年報が、大学の国際化への理解を深めるとともに、個人としての国際化を見つめ直し、具体的な行動へとつなげる契機となれば幸いです。

最後に、本学における国際交流活動の推進と発展にご尽力いただいた教職員、学生、ならびに地域・海外の関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。今後も本学の国際化が持続的に発展していくことを願い、本稿を締めくくります。

2026年6月

編集担当
年報ワーキンググループ
医学系研究科 山川路代

岐阜大学グローバル推進機構 国際企画部門 年報ワーキンググループ

山川路代（医学系研究科）
林日佳理（教育学部）
加藤洋平（グローバル推進機構）
松井真弓（グローバル推進機構）
グローバル推進機構国際総務室・留学支援室

岐阜大学国際交流年報2025

2026年6月 発行

編集

岐阜大学グローバル推進機構

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1
TEL：058-293-3351
E-mail：kokusaik@t.gifu-u.ac.jp
HP：https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/

印刷・製本 西濃印刷株式会社
〒500-8074 岐阜市七軒町15番地

